

2025（令和7）年度

2回生進級時アンケート報告書

京 都 大 学 国 際 高 等 教 育 院

目 次

1	調査の概要と目的	1
2	回答者の属性と回答率	2
3	志望意識と専門分野	4
4	学習意欲	8
5	大学教育での向上感	12
6	ILAS セミナー・実習・実験科目の受講	21
7	履修動向と成績	27
8	成績評価への納得度	34
9	学生生活	37
10	期待の実現度	44
11	教養・共通教育についての意見	46
12	まとめ	53
	【資料】 2025 年度 2 回生進級時アンケート	57

1. 調査の概要と目的

2回生進級時アンケートは、2003年度入学者を対象として2004年4月に初めて実施されて以来、長年に亘って学生の学習活動についての意識の変化を追跡してきた。初期においては紙媒体の調査を行っていたが、2007年度からは京都大学で整備された教務情報システム（KULASIS）による回答方法を採用している。毎年の調査結果は国際高等教育院のホームページに掲載し、学内外に公表されている（URL：<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/inspection>）。

本調査の第一の目的は、学生が入学後1年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について2回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実させるための基礎資料にすることである。

本調査の第二の目的は、京都大学の教育活動に対する検証である。大学機関別認証評価・大学評価基準（2004年10月制定、2020年3月改訂）では、基準6-4、6-6、6-8 のそれぞれにおいて、「適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」「適切な学習成果が得られていること」が謳われているが、授業評価アンケートや、新2回生、卒業生・修了生、就職先等関係者へのアンケート等の実施により、入学時から卒業時に至るいくつかの定点で学生意識の変化を調査することは、そのような検証の一環として有用である。2018年度からは、卒業生進路調査アンケートとの連携を図り、卒業時に調査した教養・共通教育に対する学生意識調査の結果を適宜参照できるようにしている。

調査対象： 学部新2回生（2024年度入学）全員

実施期間： 2025/04/01 ～ 2025/06/16

調査方法： KULASIS上でのアンケート回答方式。上記調査期間に新2回生が履修登録確認のため KULASISにログインした際にアンケートへの協力願いを掲示し、回答フォームに入力する方式を採用。アンケート全文は末尾に添付している。

注1) 本報告書において文系・理系の区分をする場合、文学部、教育学部、法学部、経済学部、総合人間学部は文系学部、理学部、医学部、薬学部、工学部、農学部は理系学部を含めている。

注2) 一般入試における文系・理系の区分は総合人間学部、教育学部、経済学部については募集区分による。その他の学部は注1と同様である。

注3) 各設問において回答が空白の場合は、回答数より除外して計算している。

2. 回答者の属性と回答率

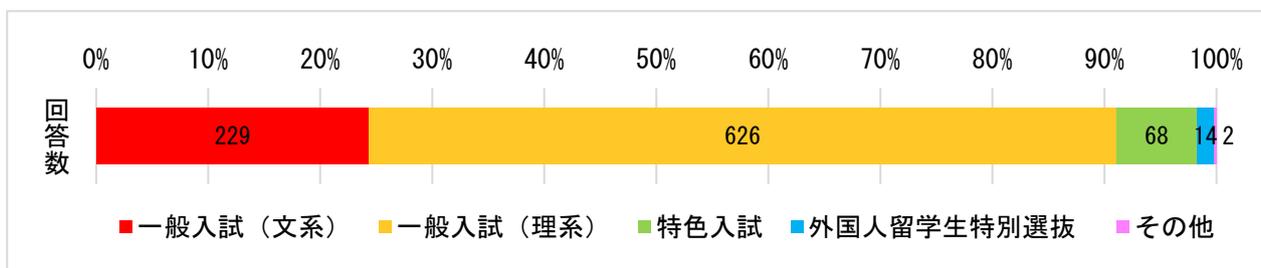
最初に回答者の属性に関する質問をし、アンケート全体での属性別の解析を可能にした。特に 2017 年度から、学部別に加えて、一般入試入学者（文系・理系）、特色入試入学者、留学生の区分を設け、必要に応じて解析区分として採用した。

Q.01 あなたが京都大学に入学した入試区分は次のどちらですか。

- ①一般入試（文系） ②一般入試（理系） ③特色入試 ④外国人留学生特別選抜 ⑤その他*

* 「その他」には外国学校出身者、Kyoto iUP 生等を含む

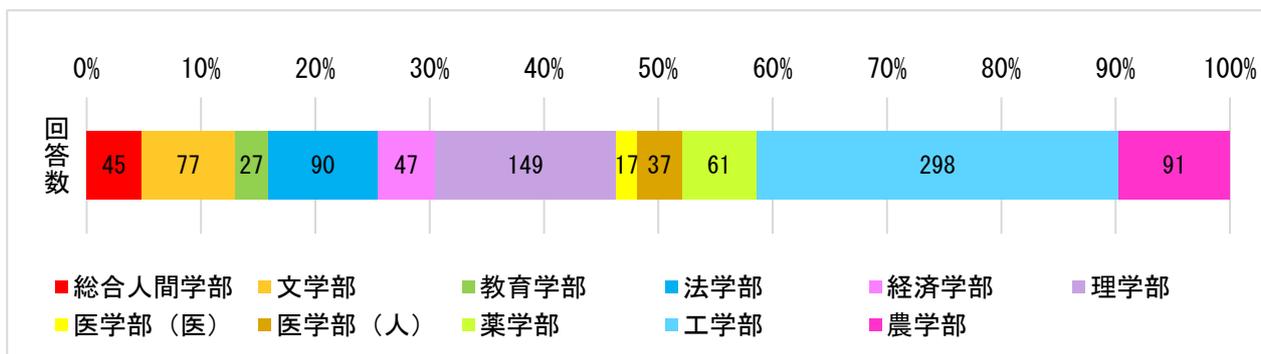
< 図 1 入試区分 >



Q.02 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部 ⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科） ⑨薬学部 ⑩工学部 ⑪農学部

< 図 2 学部 >



<表1 学部別アンケート回答者数・回答率>

学部	学年在籍者数	回答者数	回答率	文理別回答率
総合人間学部	125	45	36.0%	28.8%
文学部	225	77	34.2%	
教育学部	63	27	42.9%	
法学部	333	90	27.0%	
経済学部	246	47	19.1%	
理学部	310	149	48.1%	34.3%
医学部	233	54	23.2%	
薬学部	83	61	73.5%	
工学部	978	298	30.5%	
農学部	302	91	30.1%	
合計	2898	939	32.4%	

(2回生在籍者数：2025/5/1時点)

学部別のアンケート回答者数ならびに回答率を表1に示す。各学部にてアンケート調査協力をお願いし、また KULASIS にて再々回答を促したが、本年度の回収率は32.4%(939名)となり、昨年度の31.5%とほぼ変わらなかった。これまでも学年在籍者の半数にも満たない回答に基づいた解析が続いており、データの信頼性という観点、さらには教育改善への取組という意味においても大いに問題である。来年度以降も継続してアンケート回答率の改善にむけた対策を講じる必要がある。

<表2 学部別アンケート回答率の変遷>

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	(*)平均回答率
総	30.1%	30.6%	36.7%	57.8%	59.2%	48.0%	54.5%	37.7%	22.5%	34.7%	20.0%	31.2%	15.7%	28.2%	34.9%	37.2%	37.6%	48.8%	43.2%	35.4%	36.0%	38.2%
文	26.9%	25.6%	28.6%	50.5%	50.2%	49.8%	49.8%	41.3%	23.7%	30.4%	29.8%	28.9%	29.6%	37.9%	32.7%	47.5%	34.5%	48.0%	45.0%	28.2%	34.2%	35.8%
教	34.9%	29.2%	35.5%	37.7%	37.7%	44.3%	42.6%	32.8%	23.3%	26.2%	22.6%	17.7%	28.1%	29.5%	25.8%	54.8%	27.9%	45.9%	36.1%	39.3%	42.9%	39.4%
法	19.3%	16.8%	30.4%	44.1%	44.4%	42.6%	42.4%	30.2%	17.8%	31.7%	25.9%	18.8%	19.2%	25.0%	33.7%	34.9%	30.4%	36.6%	34.3%	32.1%	27.0%	31.2%
経	14.8%	12.9%	25.4%	37.3%	36.3%	37.5%	42.3%	44.8%	21.3%	31.0%	24.6%	19.8%	14.2%	20.9%	31.9%	32.5%	41.4%	35.7%	34.3%	28.9%	19.1%	27.4%
理	30.1%	29.9%	38.1%	49.4%	50.2%	58.0%	53.3%	45.9%	29.9%	35.2%	33.2%	28.8%	29.2%	35.6%	34.7%	52.4%	38.0%	43.0%	40.0%	32.5%	48.1%	40.2%
医	39.7%	25.7%	20.1%	33.3%	37.2%	34.6%	35.3%	32.7%	15.9%	26.4%	22.1%	21.3%	16.9%	22.3%	43.7%	38.6%	48.6%	42.8%	42.7%	29.2%	23.2%	31.7%
薬	25.8%	19.1%	35.6%	55.2%	57.8%	51.8%	52.3%	56.0%	30.5%	50.6%	34.5%	39.3%	32.2%	82.6%	62.1%	56.3%	79.8%	86.9%	73.3%	33.7%	73.5%	60.2%
工	74.7%	33.7%	35.5%	45.6%	45.2%	44.5%	50.3%	41.5%	23.2%	36.6%	23.4%	25.4%	20.8%	31.6%	29.7%	40.3%	35.8%	35.4%	35.1%	29.6%	30.5%	31.7%
農	19.5%	23.8%	34.1%	45.2%	46.1%	46.7%	50.2%	39.6%	26.6%	34.2%	32.8%	23.4%	19.5%	35.5%	44.1%	63.8%	55.0%	39.8%	47.9%	37.9%	30.1%	38.7%
全	41.8%	26.5%	32.2%	44.9%	45.5%	45.2%	47.7%	40.1%	23.1%	33.9%	26.4%	24.7%	21.4%	31.9%	34.8%	43.9%	39.9%	40.7%	39.7%	31.5%	32.4%	34.5%

(*1)2023年～2025年の3年間の平均提出率

(*2)黄色は回答率上位2学部、青は回答率下位2学部

表2には、2005(平成17)年度以降の学部別アンケート回答率の変遷を示した。最近3年間の平均回答率を見ると、60%を超える高い学部(薬学)から、30%前後の低い学部(法学、経済、医学、工学)まで大きな差があり、全体、文系、理系として集計するときは、回答率の差による影響を受けることに留意されたい。薬学部では、2018年度より新学学期に実施される2回生ガイダンスで積極的に回答を促した成果が現れてきた。他の学部においても、今後の回答率改善策の検討の参考にさせていただきたい。

3. 志望意識と専門分野

本学はホームページやパンフレット、オープンキャンパス等のさまざまな方法により、各学部の学術分野、教育内容、学生生活等を広報し、入学者に期待する資質をアドミッションポリシーとして公開している。入学試験という関門を通過して京都大学の各学部に入学者は自らが志望する分野を選択していると考えられるが、将来の活躍分野をどこまで具体的に意識しているか、またそれが学習の動機付けに結びついているかは入学後の教育効果を大きく左右するものと考えられる。つまり、

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習効果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖を期待する。一方、その志望意識とこれから学ぶことになる専門分野との一致度が良くない場合は、負の連鎖を起こす恐れがある。アンケートの初めにこの重要点について Q.03～Q.06 で把握し、以後の学習行動や学習効果との相関を考察した。

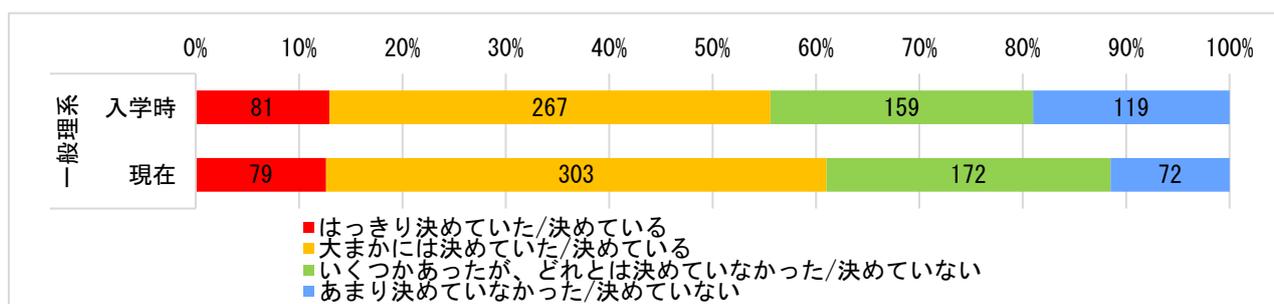
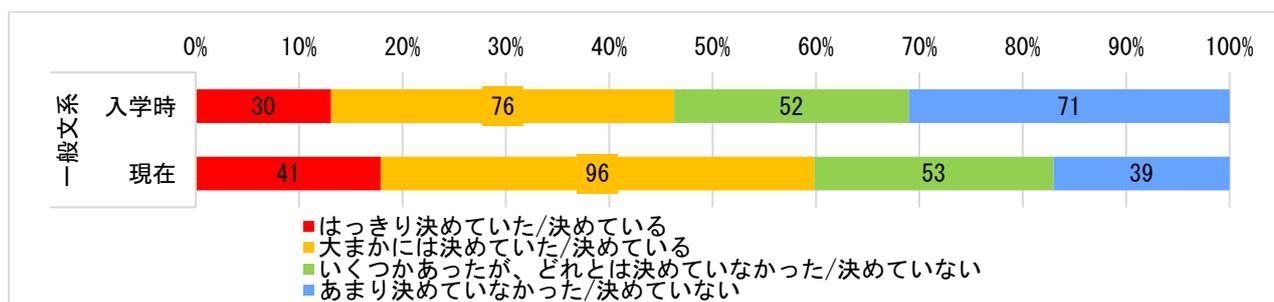
Q.03 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。

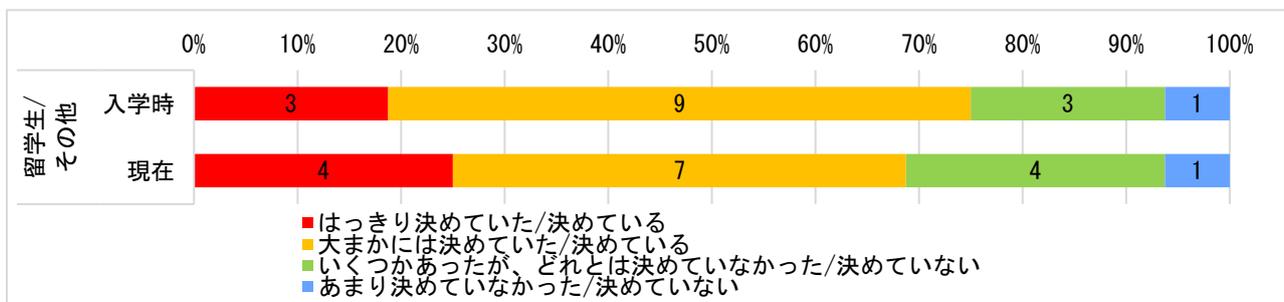
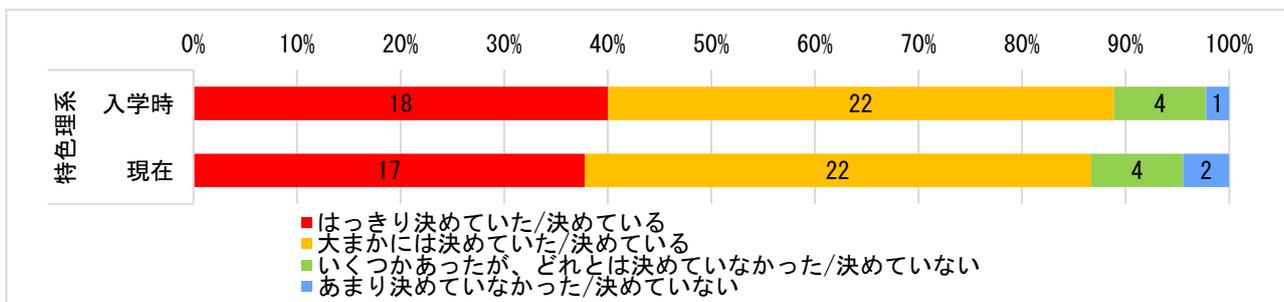
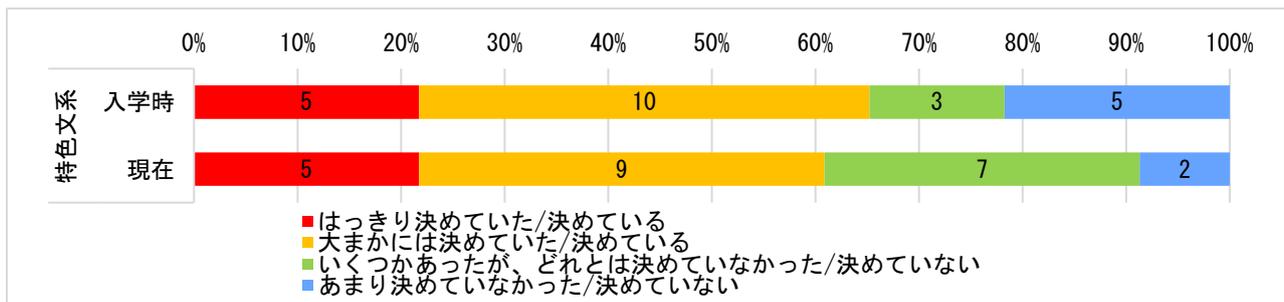
- ①はっきり決めていた
- ②大まかには決めていた
- ③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
- ④あまり決めていなかった

Q.04 今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。

- ①はっきり決めている
- ②大まかには決めている
- ③いくつかあるが、どれとは決めていない
- ④あまり決めていない

<図3 志望意識・入試区分別>





Q.03 と Q.04 は入学時と 1 年余り後の現在で、志望意識を尋ねた質問である。平均として、一般文系、一般理系とも 15%前後の「はっきり決めている」を含む 50%以上の学生が将来活躍したい分野を「(大まかには) 決めている」。また、12-15%は現在でも「あまり決めていない」と答えている。専門分野の中で具体的な活躍希望分野がイメージできていないということかも知れないが、専門分野そのものに志望意識をもてない場合は、今後の勉学のモチベーションを保てるかという不安が残る。この点は Q.06 で確かめる。

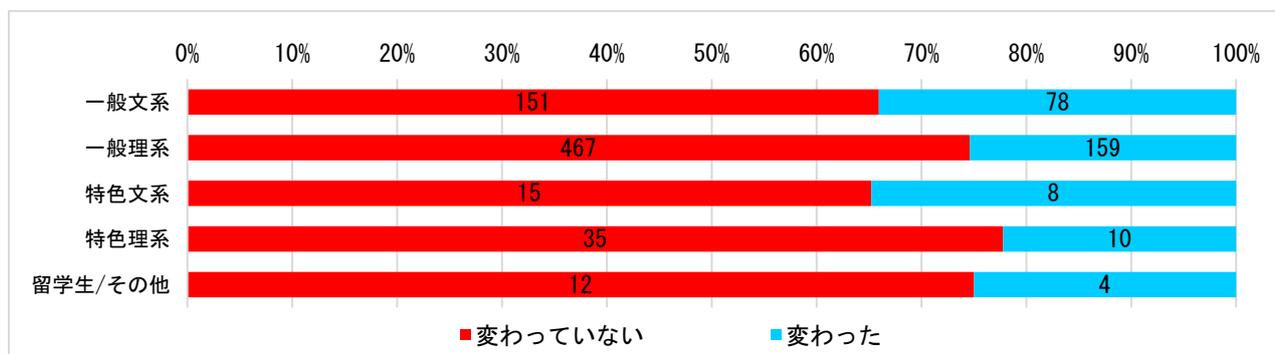
Q.03 と Q.04 を比較すると、全体として例年と同様に、1 年後の現在の方が「はっきり決めている」と「大まかには決めている」の回答合計がやや増加する傾向にある（特色文系・理系は減少傾向）。一方、これまでと比較して、「あまり決めていない」が（一般文系：30→19→15→24→14→17→17%、一般理系：22→18→18→15→14→16→12%）と減少傾向で、かつ入学後に次第に志望意識が明確になるという好ましい傾向を示している。

一般入試と特色入試の入学者を比較すると、特色入試制度の趣旨を反映して「(大まかには) 決めている」の比率が特色入試区分では格段に大きくなる傾向にある。理系の特色入試では、「はっきり決めている」あるいは「大まかには決めている」の比率が入学 1 年後に 10~20%程度減少する傾向が続いていたが、今年度はその差がみられなかった。ただし、特色入試の区分では回答数が少ないため、今後も継続的に推移を注視する必要がある。また、留学生の区分のデータも回答数が少なく、年々のばらつきが大きい。

Q.05 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

- ①変わっていない ②変わった

<図4 希望分野の変化・入試区分別>

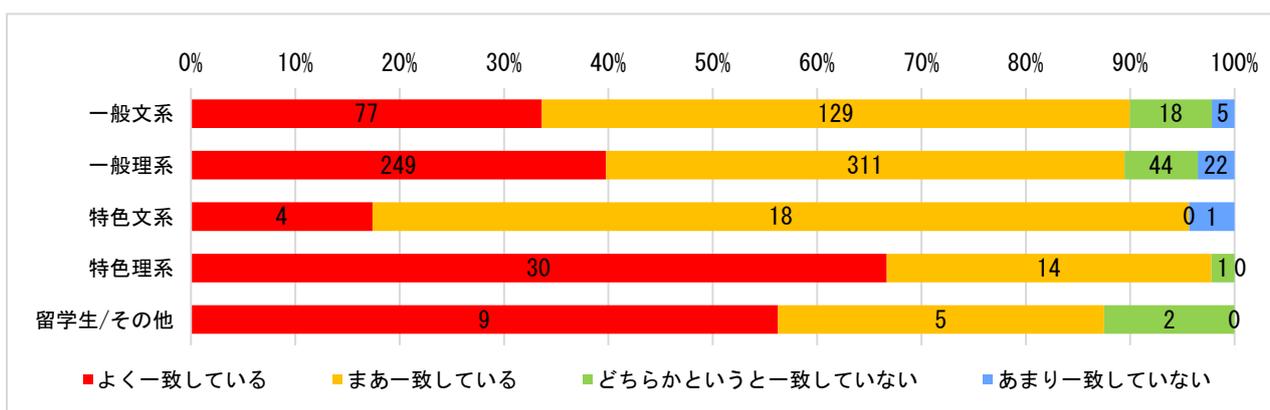


Q.05 では、1年間の大学生活を経て、志望分野が変化したかどうかを尋ねている。図4には入試区分別の結果を示したが、一般文系と比較して一般理系学生では10%ではあるが志望変化が少ないことが分かる。Q.03、Q.04では、特色入試の志望意識の変化の違いに注目したが、ここでは希望分野が変わったのは文系35%、理系22%であり、他の区分と同様である。回答数が少ないが、こちらも含めて詳細な分析が必要であろう。留学生区分での「変わった」と答えた学生の比率は、年々のばらつきが大きい25%である。

Q.06 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

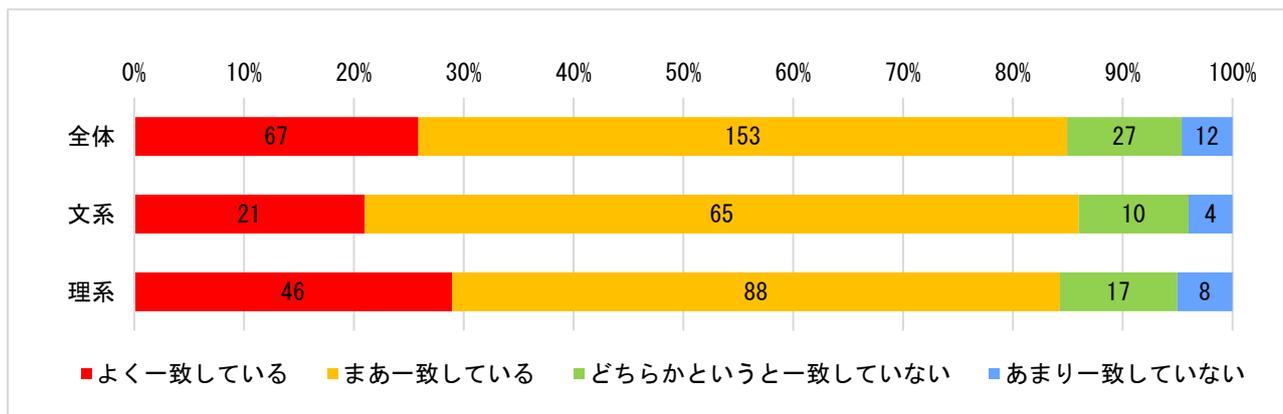
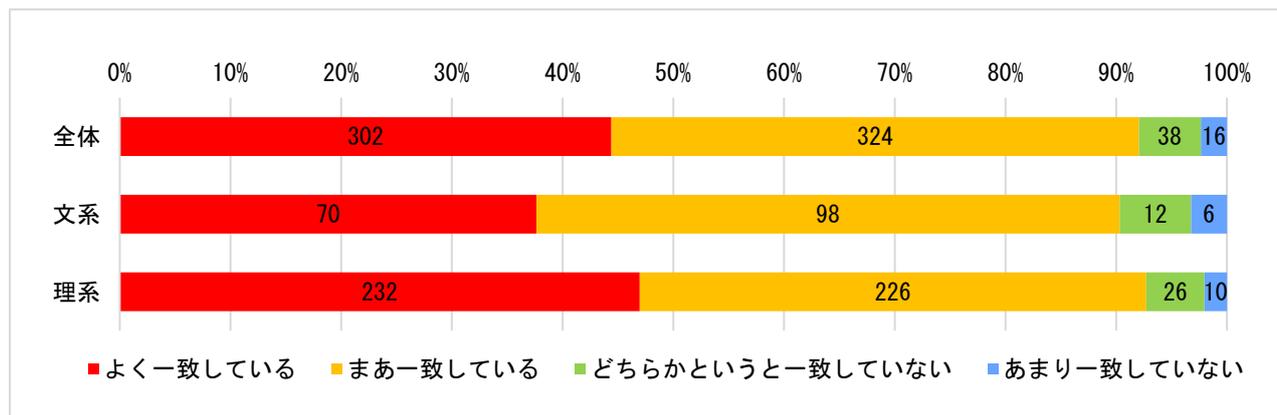
- ①よく一致している ②まあ一致している ③どちらかという一致していない
④あまり一致していない

<図5 希望分野と専門分野の一致度・入試区分別>



1年間の学習経験と大学生活を経て、自らの希望分野とこれから学ぼうとする専門分野との一致度について学生がどのように思っているか、を尋ねた。この段階で「どちらかという一致していない」、「あまり一致していない」は望ましくない回答である。一般入試の文系・理系ともその比率は10%前後にとどまり、多くの学生が「よく一致している」、「まあ一致している」と回答していることは良い結果といえる。

<図6 上：希望分野が「変わっていない」と回答した学生、下：「変わった」と回答した学生>



次に、Q.05 で希望分野が「変わっていない」と「変わった」と答えた学生の区分ごとに、一致度の解析を行った。「変わっていない」と答えた学生の専門一致度は高く、全体では90%を超えている。一方、「変わった」と答えた学生の区分では「(よく・まあ)一致している」の回答が文系理系ともに80%を超えており、「変わった」学生はより一致度が低くなる方向に学生の意識が変化していることを示している。ここで、希望分野が変わっていないと答えた学生の約8%、変わったと答えた学生の約15%が(どちらかというとも・あまり)一致していないと回答している点は問題点である。

4. 学習意欲

学習意欲については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。経年変化を見るために、学習意欲を数値化してその平均点を各時期（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）についてプロットした。ここで、数値化は、「①非常に意欲あり」を5とし、「⑤まったく意欲なし」を1とした。なお、本アンケートは昨年度までは主に4月の回答なので、コロナ感染対策によるオンライン授業の影響は2021年前期半ば以降の回答に含まれていると考えられる。

Q.07～Q.11 入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の5つから選択してください。なお、この質問はQ.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。

Q.07 <入学当初の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08 <前期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09 <後期開始の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.10 <後期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11 <現在>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

<図7 学習意欲の経年変化（2005～2025年）>

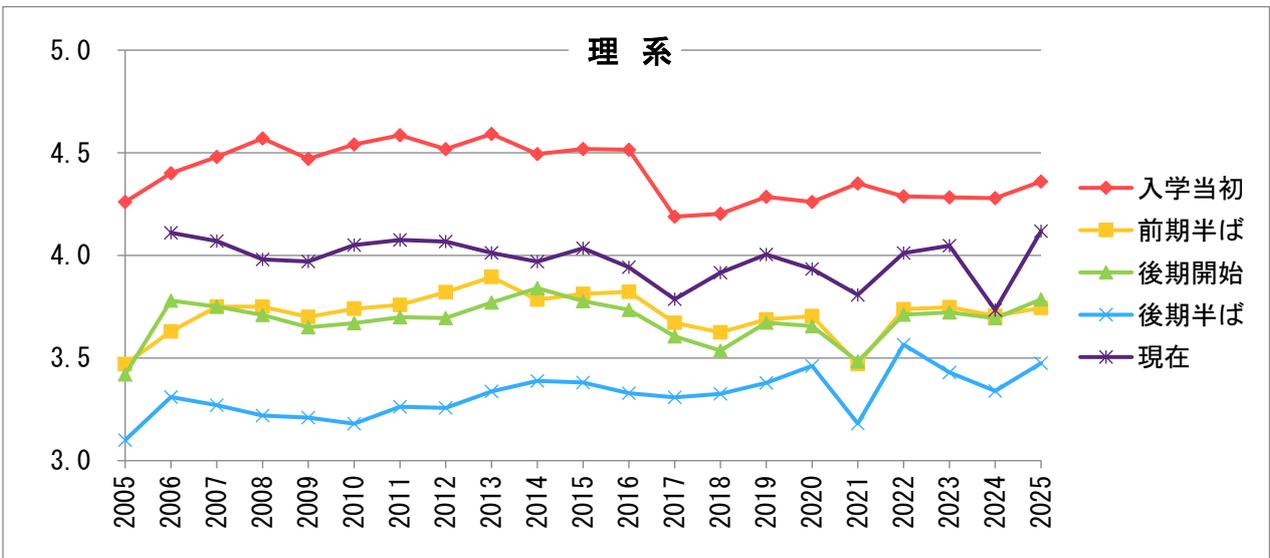
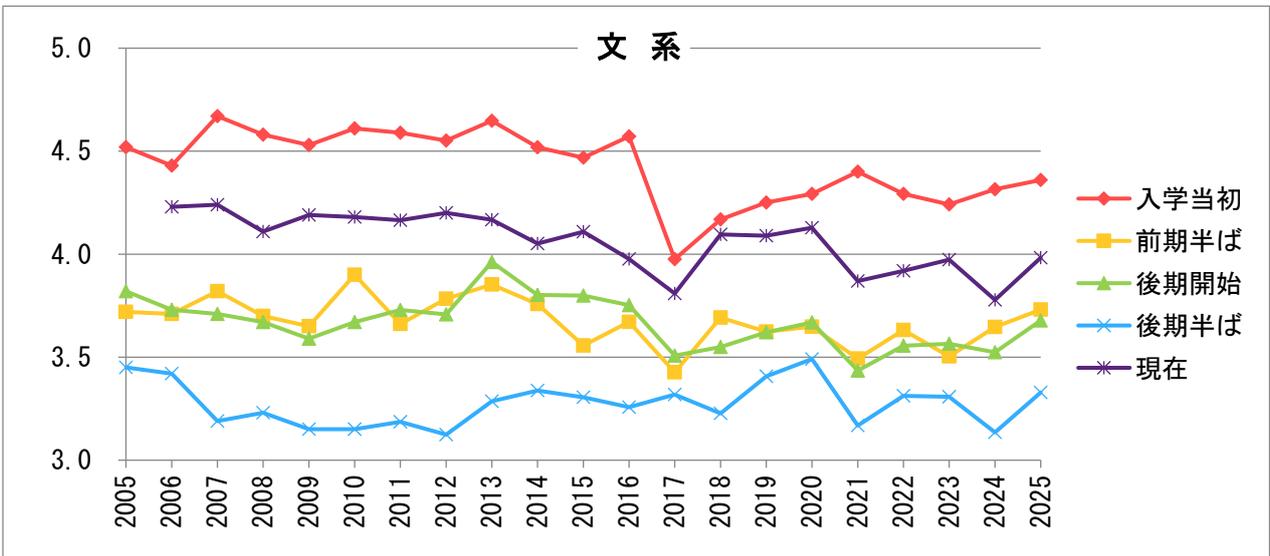
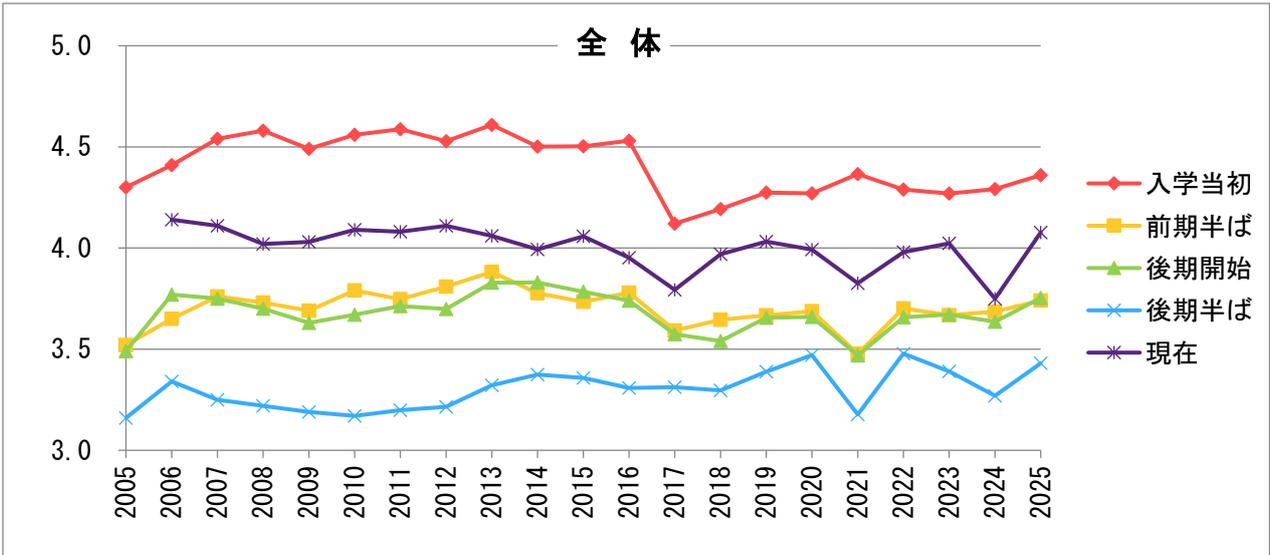


図7に示したように、入学当初の高い学習意欲から、次第に低下して後後半ばで底になり、2回生新学期で回復するという傾向は長年同じである。文系、理系ともに、それまでと比較して昨年度の2回生進級時（現在）の値は0.2~0.3ほど低下したが、今年度はほぼ2023年度の値に回復している。2021年度における前期半ばから現在までの4時期の値は、調査時期が2か月以上遅れた昨年度を除くと、2006年度以降で最低値となっており、コロナ禍のオンライン授業の影響が大きかったと考えられるが、その影響は一年限りであった。特に理系の回復が著しい。

注1) 2017年度調査で入学当初の意欲値が以前より大きく低下した理由は、それまでは学生が回答するに当たり自身が入学時に記入した抱負や期待を読む欄を設けていたので回想効果があったが、2017年度よりこれを廃止したためと思われる。

<図8 学習意欲の変化・全体比率 2025年度>

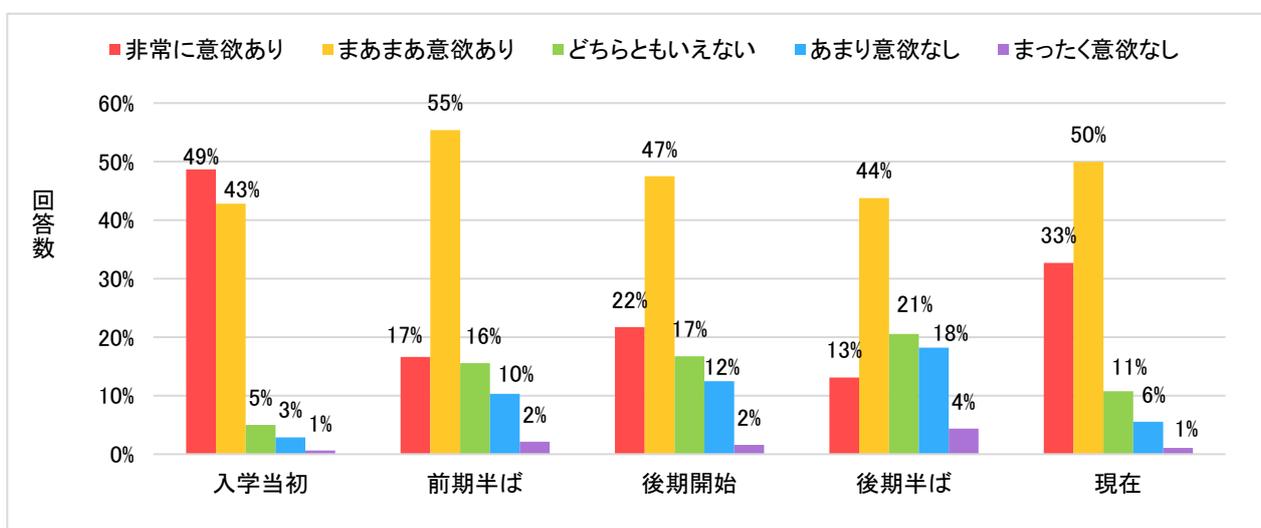
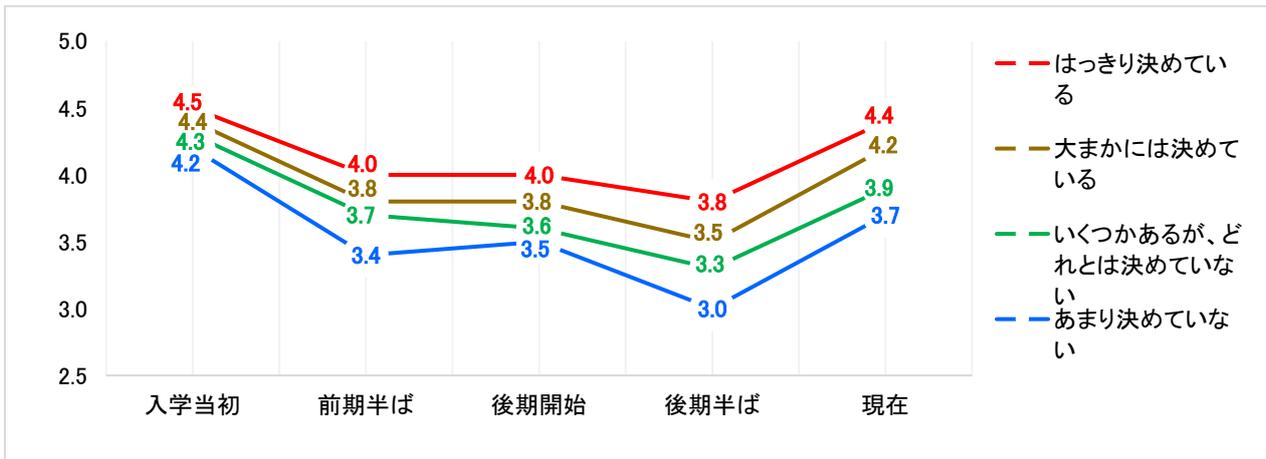


図8は学習意欲分布の時期的な推移を示している。全体的には、入学当初の高い学習意欲が次第に低下して後後半ばで底になり、2回生新学期（現在）である程度は回復するという傾向を繰り返している。赤の「非常に意欲あり」が前期半ばで激減するのは致し方ないとしても、青・紫の「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」が時間を追ってやや増加がみられるのは残念な傾向である。1回生での意欲低下をいかに防ぎ、2回生につなぐことができるかが引き続き大きな課題である。

これまで学習意欲が入学後に顕著に低下する傾向が指摘され、学生の一般的な特性と考えられてきた。さらに、これまでの調査でも学部間の差が認められるところであり、各学部での履修指導やカリキュラムの違いも影響している可能性がある。これらの原因について、各学部でそれぞれにこれまでのデータを分析されることが望まれる。

教養・共通教育としては、特に、1回生後期に向けての著しい学習意欲低下を如何に防ぐかが重要な課題であり、共通の対策が求められる。そのヒントになる解析結果を以下に示す。

<図9 学習意欲の変化 志望別>



<図10 学習意欲の変化 一致度別>

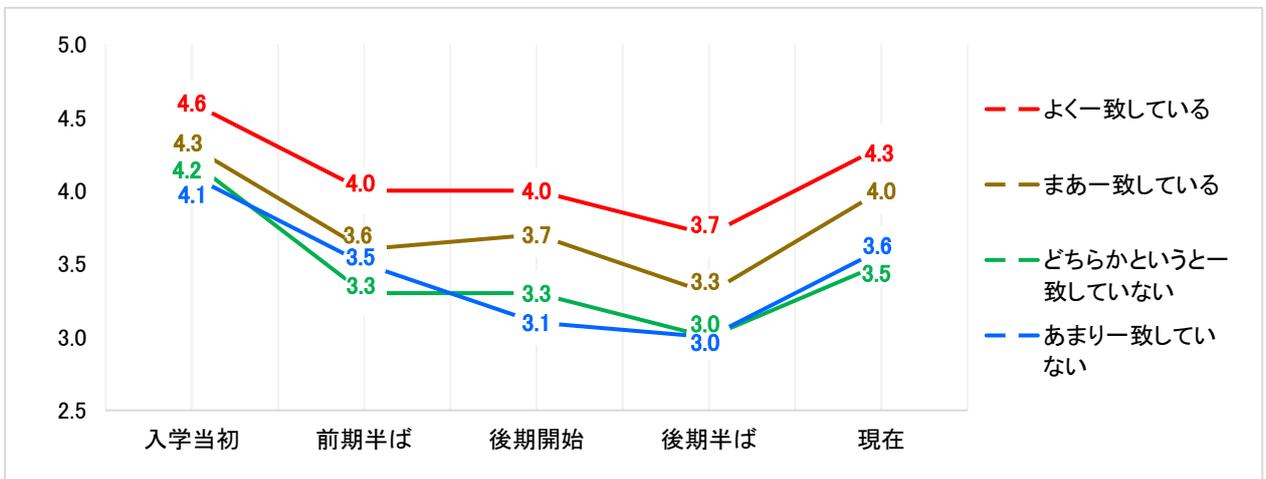


図9はQ.04志望意識の回答群別に、学期ごとの数値化した学習意欲の平均値を図示したものであり、図10は同様にQ.06一致度の回答群別に、学期ごとの学習意欲の平均値を図示したものである。志望意識の有無、および、希望分野とこれから学ぼうとする専門分野の一致度が、学生の学習意欲にどの程度の影響を与えているかを見ることができる。

図9からは、入学後のどの時期においても、志望意識の有無により学習意欲に明確な差がでていことが分かる。「あまり決めていない」グループは、他と比べて当初より学習意欲が低く、学期ごとの意欲低下が著しく、そして、2回生になっても回復度が低い。また、図10からは、希望分野と専門分野の一致度の度合いに依存して、入学当初からの学習意欲が分かれ、その低下の度合いや回復度にも差があることが分かる。入学当初において各回答群ですでに差がある(4.1~4.6)が、1年が経過して2回生になっても回復力が弱く、各回答群で、より大きな差(3.5~4.3)となって残っている。

予想されたように、学生が抱くこの二つの意識が、極めて明瞭に、入学後の学習意欲に大きな影響を与えており、志望意識 → 学習意欲 の悪循環を示す結果である。後述するように、学習意欲の低下は大学生活全般に波及するところであり、今後とも注視して対策を講じていく必要がある。

5. 大学教育での向上感

入学後 1 年間の大学での学習を経て、学生が自己能力の向上についてどのような意識をもっているかをいくつかの要素能力について質問した。ここでは、「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」、「専門分野で基礎となる学力」、「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」、「自ら考え、主体的に行動する能力」、「英語の能力」の 6 つの能力について Q.12～Q.17 で尋ねた。これらは多くの学部のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する項目であることから、学生が卒業するまでに「専門知識の向上」を含めて高い向上感を得られることが、教育効果の検証として重要となる。

Q.12 入学後 1 年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1 年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 1 年間で、あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1 年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

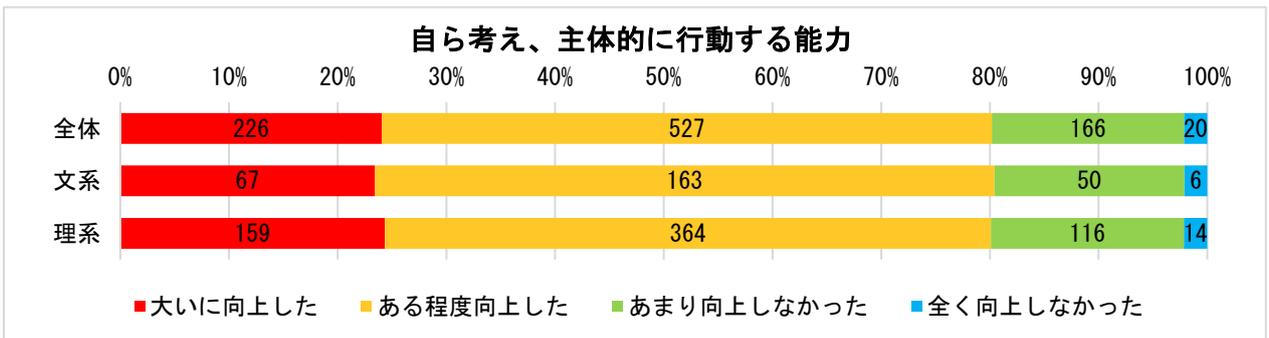
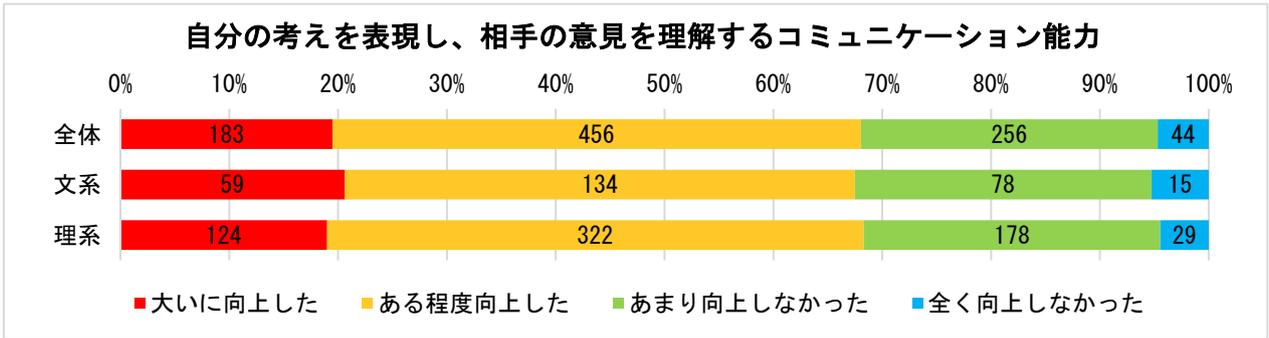
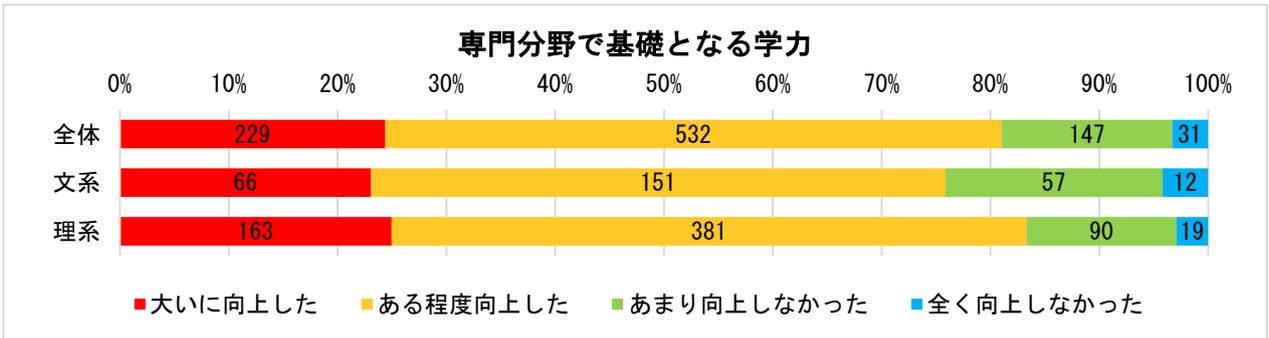
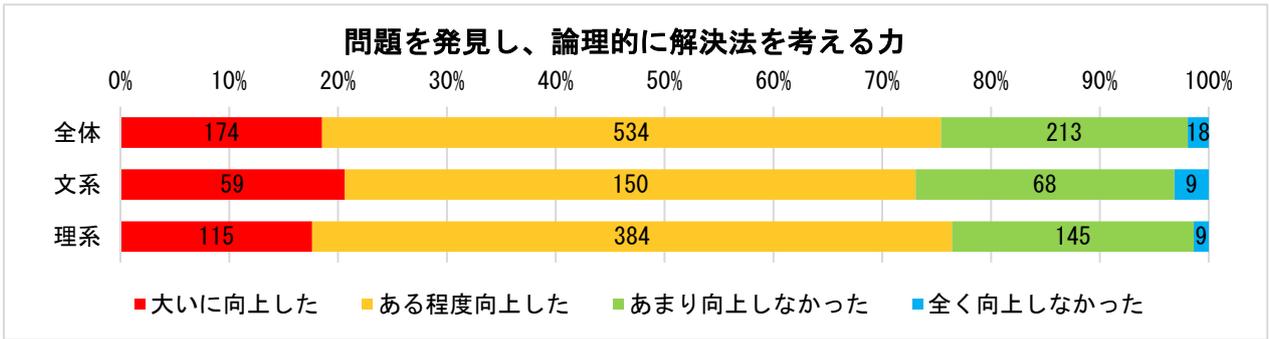
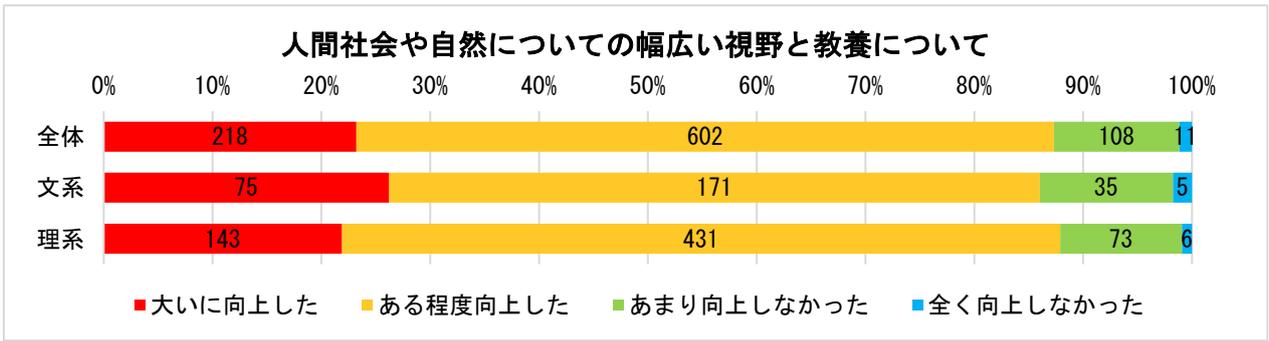
Q.16 1 年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.17 1 年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第 1 外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

<図 11 大学教育での向上感 各要素別>



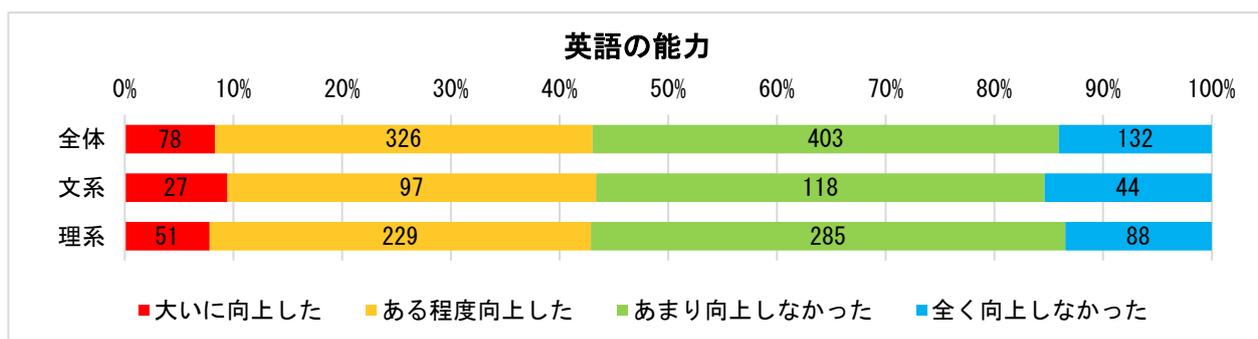


図 11 は各要素能力について全体、文系、理系別の回答比率を図示している。「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見と、「あまり向上しなかった」、「全く向上しなかった」の否定的意見の比率に着目すると、文系、理系により差があるものの全体の概観としては、肯定的意見がこの 7 年間で次のように推移してきた：

「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」：78%→82%→75%→84%→86%→86%→87%

「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」：68%→69%→62%→70%→72%→70%→75%

「専門分野で基礎となる学力」：70%→69%→68%→77%→76%→81%→81%

「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」：62%→69%→47%→67%
→66%→65%→68%

「自ら考え、主体的に行動する能力」：76%→75%→62%→75%→77%→73%→80%

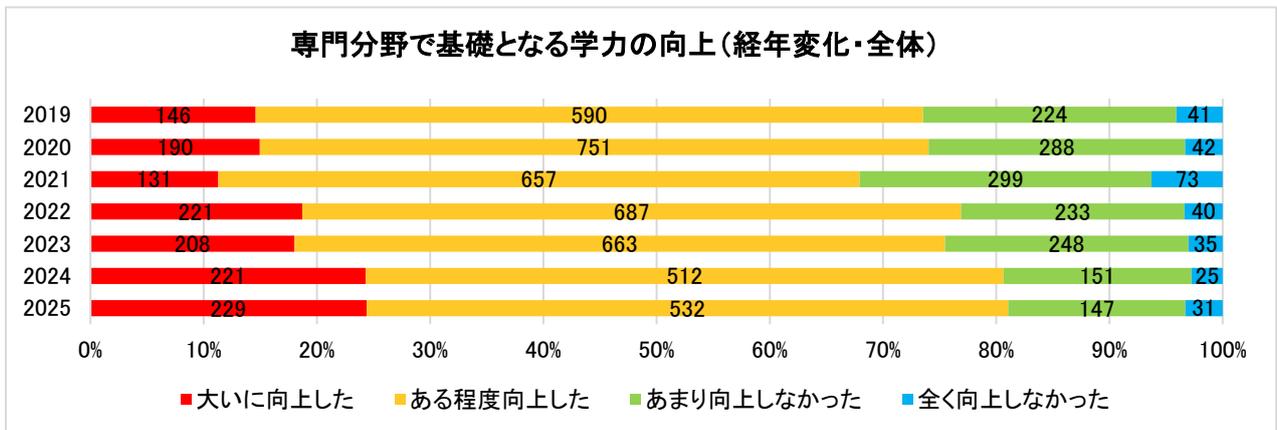
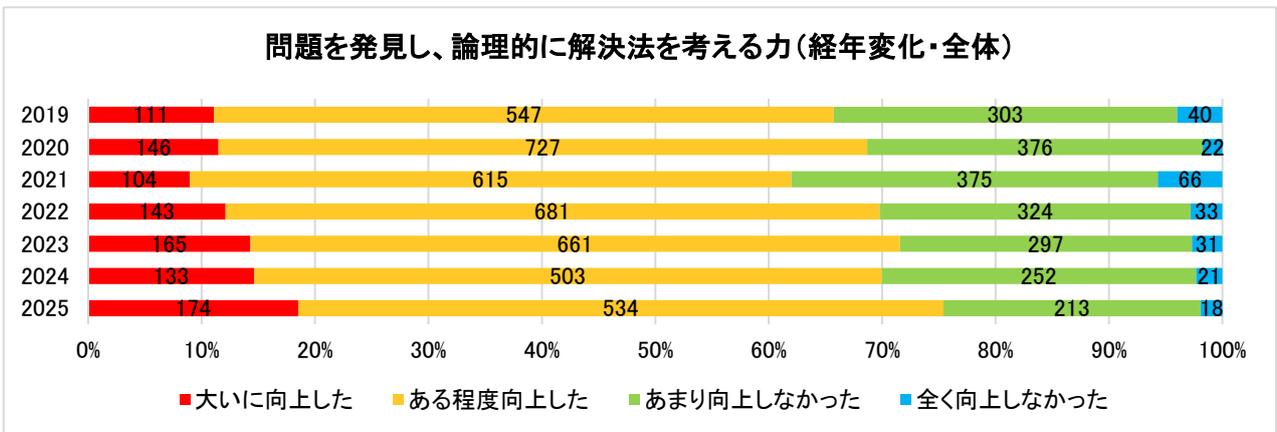
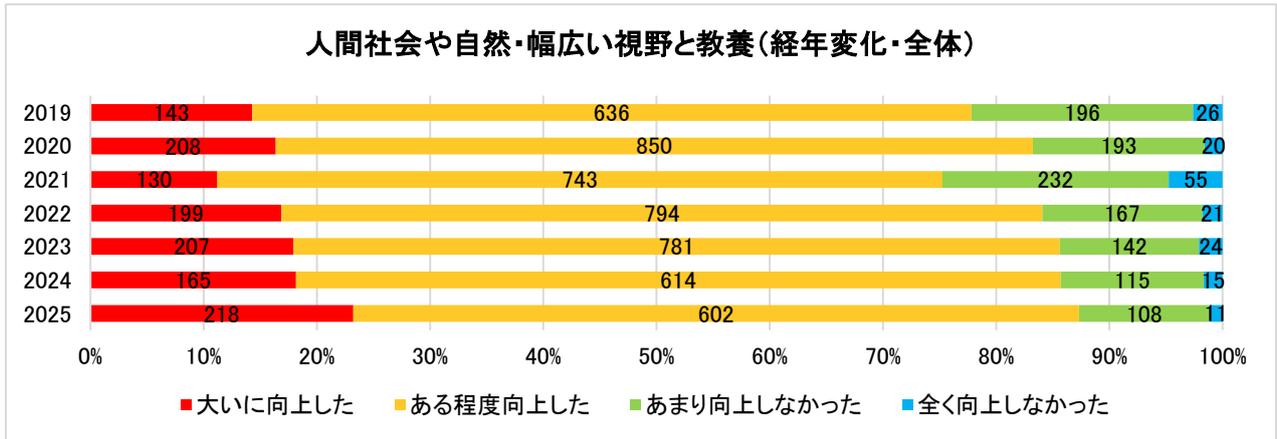
「英語の能力」：37%→44%→37%→42%→38%→36%→43%

ここで、2021 年度（下線付き）はコロナ禍の影響もあり「コミュニケーション能力」「主体的に行動する能力」の比率が 15%ほど減少し、「専門分野基礎学力」以外の要素能力もそれぞれ 7%ほど減少していたが、近年はコロナ禍以前に近い値あるいはそれを超える値に戻っている。

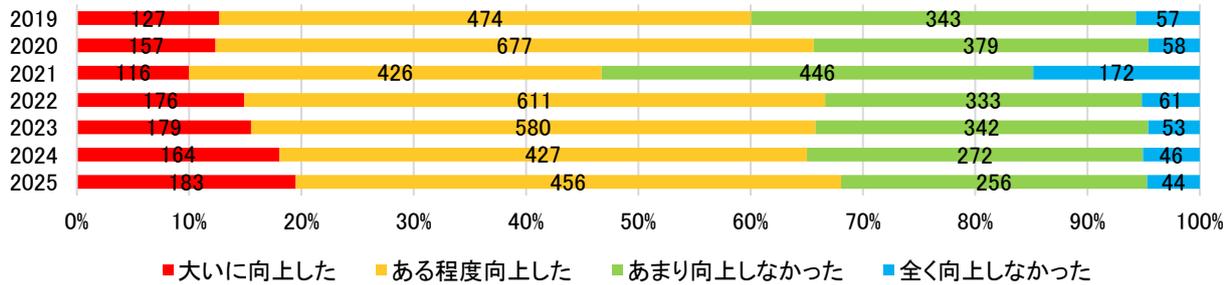
教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」と「主体的に行動する能力」の向上感が高いことは良い結果であり、前者が 87%とこれまでの最高値を維持していることは好ましい。これらに対して、「英語の能力」についての向上感は、2016 年度入学生から E 科目制度を導入して英語改革を進めているにも関わらず、全体での肯定的意見は 40%前後で推移してきており、今年度は 43%であった。肯定的意見が 40%強に留まっており、ここでもう一度教養・共通教育の英語科目カリキュラムを見直して、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることにより、向上感・達成感が得られる仕組みをさらに検討することが必要である。

さらに、図 12 には全体のデータのみであるが、各要素能力について向上感の評価比率の棒グラフをこの 7 年間の経年変化として示す。既に述べたようにコロナ禍の影響により「コミュニケーション能力」「主体的に行動する能力」の比率はそれぞれ 2 割～1 割程度低下し、他の要素能力も減少していたが、近年はそれ以前の値を越える値にまで回復している。

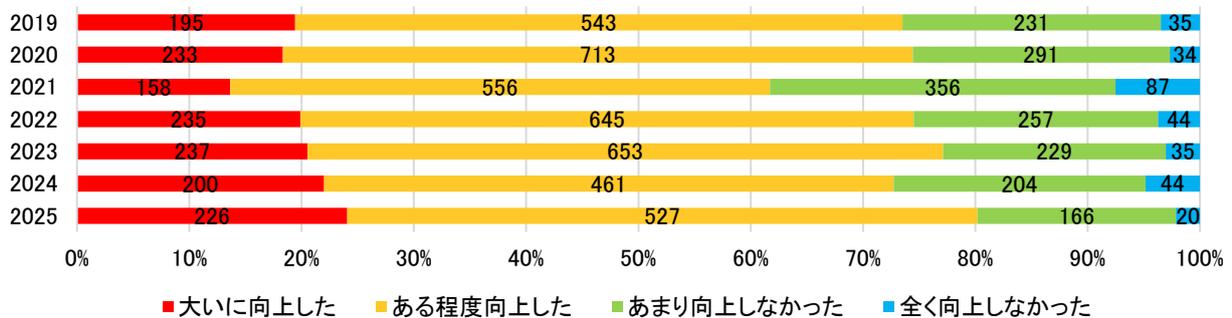
<図 12 大学教育での向上感 各要素別・経年変化・全体>



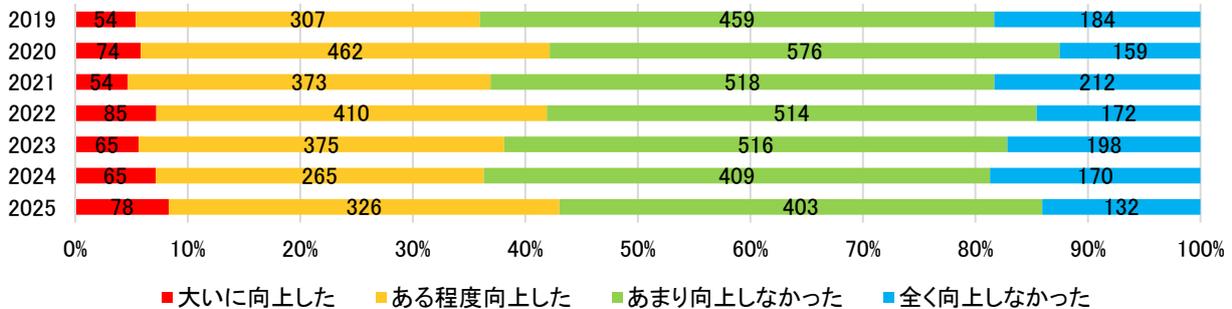
自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力 (経年変化・全体)



自ら考え、主体的に行動する能力(経年変化・全体)



英語の能力(経年変化・全体)



2017年度卒業生から卒業時アンケート（3月実施）において、全学共通教育についての意識を問う設問を加えた。これにより入学時の期待度からスタートし、2回生進級時の実現度、向上感（満足度）、そして大学生活4年間の総括としての全学共通教育の効果に関する意識をシリーズで観察できるようになった。

以下に卒業時アンケートから全学共通教育での学習に関する5項目についての調査結果を転記する。

【参考資料】2024 年度卒業生進路調査アンケート結果より転載

全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

(1) 専門以外の幅広い知識・教養

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(2) 専門分野で基礎となる学力

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(3) 英語の能力（英語以外の言語を第1外国語とする人はその言語能力）

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(4) 初修外国語の能力（外国人留学生については日本語の能力）

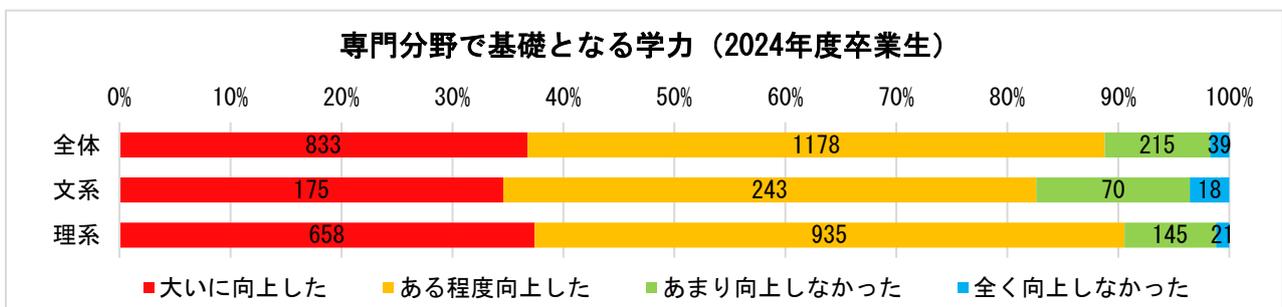
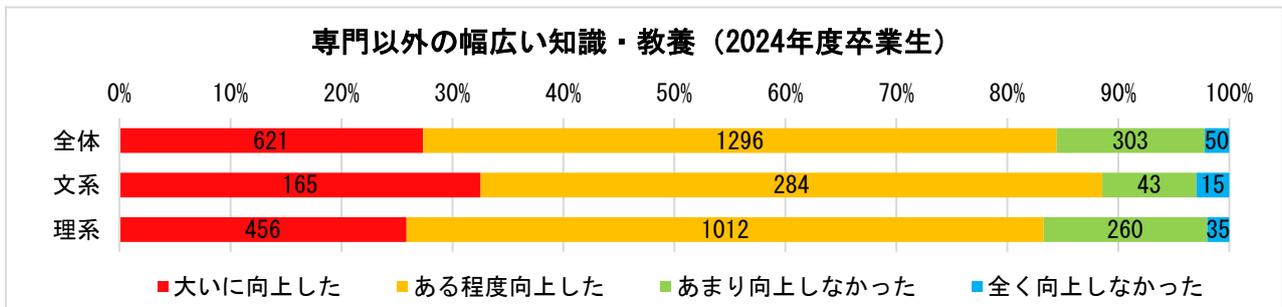
- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった
⑤初修外国語は修得しなかった

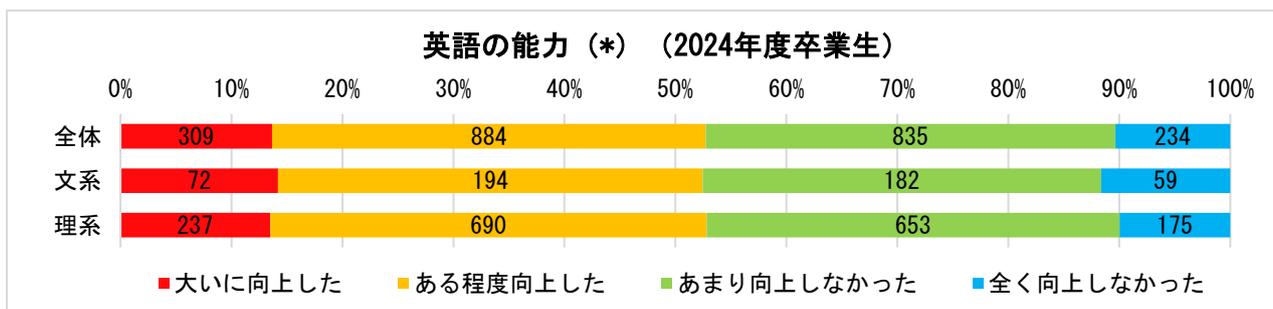
(5) 将来の研究分野や進路を決める手がかり

- ①大いに得られた ②ある程度得られた ③あまり得られなかった ④全く得られなかった

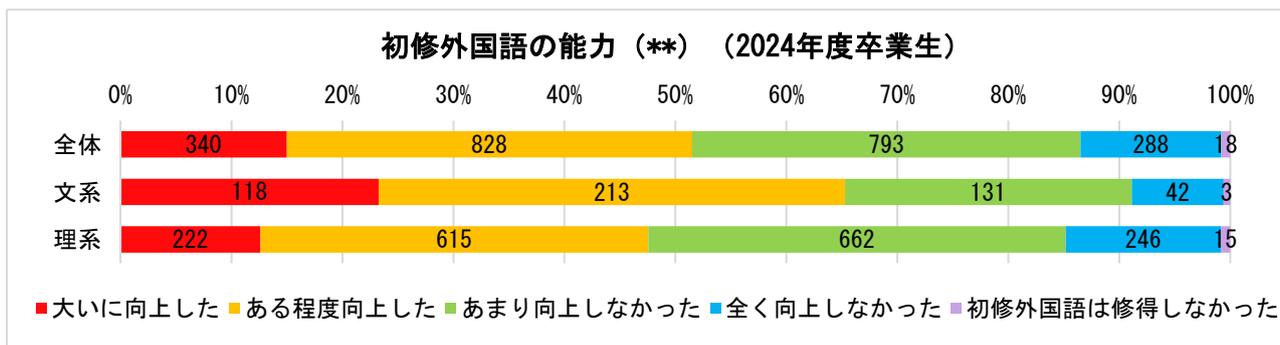
(※) 医（医）は設問なし

< 図 13 卒業生進路調査アンケート結果（要素別） 全学共通科目関連抜粋 >

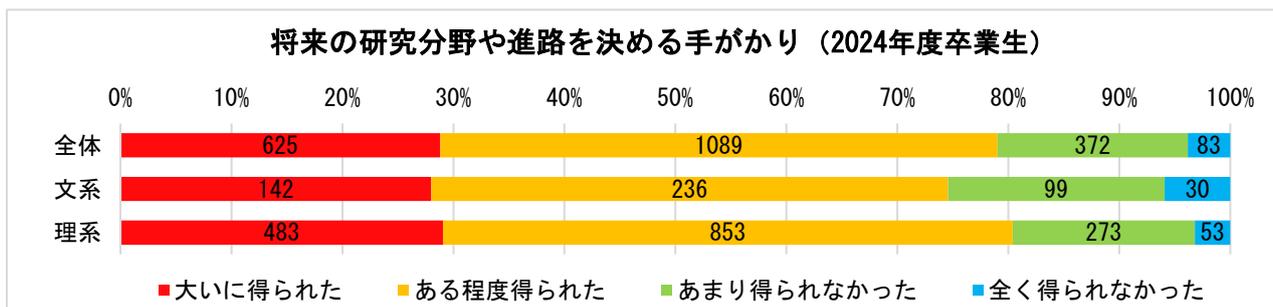




(*) 英語以外の言語を第1外国語とした方は、その言語の能力



(**) 外国人留学生については日本語の能力



(※) 医 (医) は設問なし

この中で、(1) 専門以外の幅広い知識・教養、(2) 専門分野で基礎となる学力、(3) 英語の能力の3項目は、2回生進級時アンケートと共通であることから、卒業時との向上感の変化をみることができる。ただし、2025年3月在籍の4回生（主として2021年度入学生）と、2025年5月在籍の2回生（主として2024年度入学生）の意見であることから、ほぼ同一のカリキュラムで教育を受けた学生群の意見変化ではあるが、同一群の3年間（2回生→4回生）の意見変化を示すものではない。

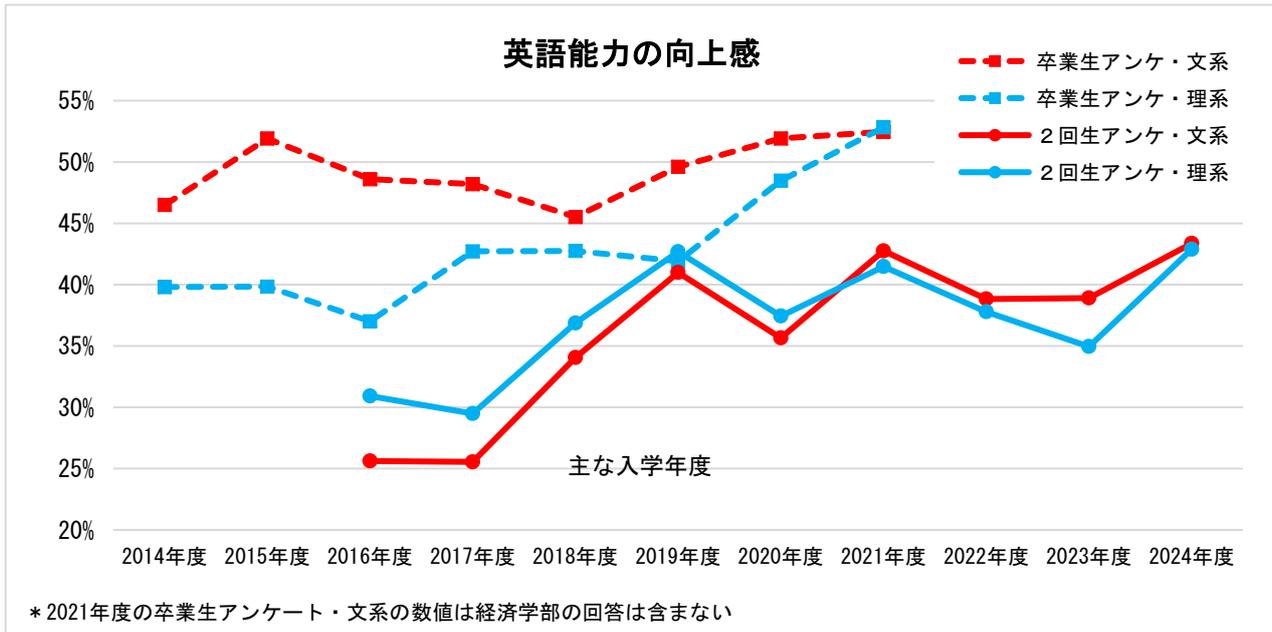
概観すると(1) 幅広い知識・教養では、2回生も4回生も「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見が約85%であり、回生による変化はあまりないと言える。しかし(2) 専門分野の基礎では2回生の肯定的意見が81%であるのに対して、4回生では全体で90%近い肯定的意見である。学部別にみると2回生時点では肯定的意見が60%台の学部も散見されたのが、4回生時点ではほとんどの学部で肯定的意見が80~90%台であり、どの学部でも専門教育を修了した段階の方が基礎教育の意義をより自覚できているのではないかとと思われる。

(3) の英語能力では、やはり卒業時でも肯定的意見が約50%で、他の調査項目と比較して低くなっている。学部ごとのばらつきが大きい項目であり、E科目を含む要卒単位など学部ごとのカリキュラム設定と

の関連を含めて詳細まで分析し、今後の改善策を検討していく必要があると考える。ほぼゼロからスタートする初修外国語のグラフでも学部間のばらつきが大きく、文系では肯定的意見が60%以上の学部が2学部、50%以上が2学部と多いのに対して、理系では40%以下が3学部・学科と多く、文系と理系、あるいは学部ごとのカリキュラムの差が向上感の差となって表れていると考えられる。

英語の能力の向上感について、2回生進級時アンケートと卒業生アンケートを比較

<図14 英語能力の向上感>



毎年のアンケート結果を継続して表示するため、図14に、回答者の主な入学年度を横軸にして、文系と理系の英語能力の向上感（肯定的意見の%）の経時変化を示した。実線で示した2回生進級時アンケートで顕著なことは、前述したように、近年の英語能力の向上感の増加である。文系（赤）も理系（青）も主な入学年度が2016年度、2017年度と比較して、2018年度、2019年度と向上感が増加している。2020年度はおもにコロナ禍の影響で約5%減少したと思われるが、2021年度は2019年度のレベルに戻り、一昨年度・昨年度はやや低くなり、今年度は2021年度のレベルに回復している。前述のように、本学では英語教育の充実を目指して2016年度にE科目制度を主とした英語教育改革を実施し、向上感の値が10%ほど高くなったが、2019年度以降は文系理系ともに頭打ちの状況である。

もう一つ特徴的なことは、点線で示した4回生卒業時アンケートでの向上感が2回生進級時よりさらに伸びていることである。2016年度～2021年度に入学した6年度分の同一学生群について、3年後の向上感の増加を実線と破線の対比として見るができる。2回生進級時アンケートでの英語能力の向上感の増加期に入った2018年度でも、文系理系ともに向上感が5～10%程度増加したが、2019年度入学生については、文系では10%近い伸びがあるものの、理系では伸びていない。また、入学直後にコロナ禍影響の大きかった2020年度入学生は、文系理系ともに10～15%程度の伸びとなっている。同一群の向上感増加の経年変動については、これからも継続して注視していきたい。

他の項目と比較して「英語の能力」についての向上感が限定的であることは、英語教育改革の内容と実

績についてここでもう一度見直し、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることで向上感・達成感が得られる仕組みをさらに検討することが必要であろうことを示している。

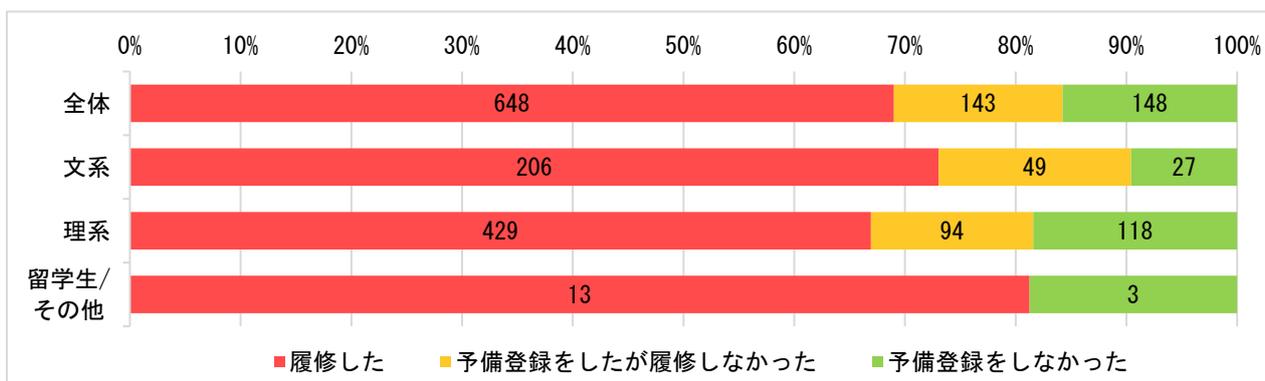
6. ILAS セミナー・実習・実験科目の受講

1998 年度に始まる新入生向け少人数セミナー（通称：ポケット・ゼミ）は、開始以来開講数が大幅に拡大して現在の ILAS セミナーに至っている。ILAS セミナーは、主に新入生を対象に、「ILAS セミナー」と「ILAS Seminar-E2」の 2 種類が開講されている。各学部・研究科・研究所・センター等の教員と学生との差向かいのゼミナール形式で、様々なテーマを扱った少人数の授業として企画され、入学当初の重要な初年次教育と位置づけられている。2025 年度前期においては 247 科目が開講され、受講定員 2,902 名、受講申し込み者数 2,425 名、受講許可者数 2,114 名であった。科目数、受講定員、申し込み者数、受講許可者数は昨年度とほぼ同じであった。入学者（2,901 名）に対する受講申し込み率、申し込み者に対する受講決定率はそれぞれ 84%、87%程度であり、結果として入学者に対する受講許可率は約 73%となっている。6 では、受講の現状を調査して今後の改善策を検討することが目的である。

Q.18 1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。

- ①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

<図 15 ILAS セミナーの受講>

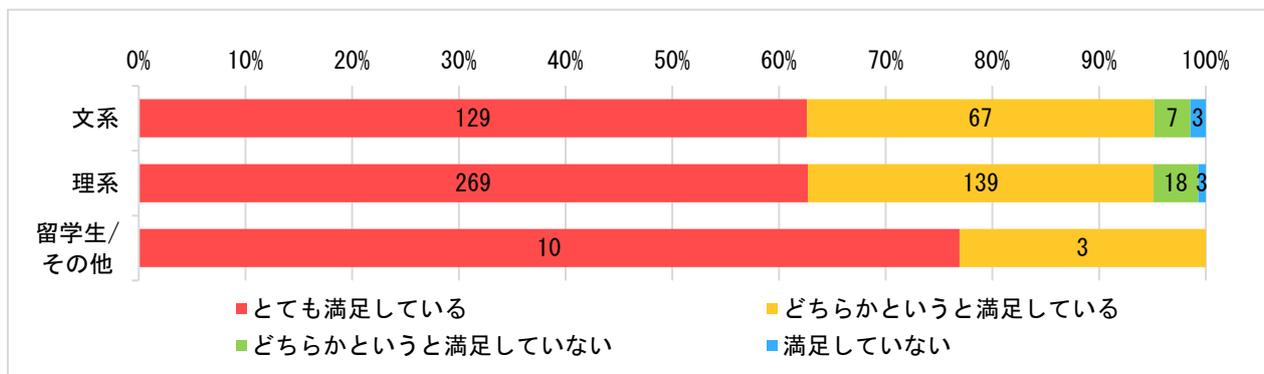


Q.18 では、受講の有無を尋ねた。「ILAS セミナー」では少人数ゼミという性格上、最小 5 名から最大 25 名までの定員を設けている。2019 年度から第 5 希望まで（それまでは第 3 希望まで）の予備登録を可能にして、抽選により履修許可を出している。その結果として、2018 年以來「履修した」の比率が全体で 65%→70%→65%→62%→66%→66%→67%→69%と推移してきている。また、近年の状況と同様に全体の 16%が予備登録そのものをしていない。文系と理系を比較すると、今年は理系の履修率が文系より 6%ほど低くなり、過去 8 年間では、文系：74%→74%→72%→64%→74%→70%→70%→73%、理系：61%→69%→62%→62%→62%→63%→65%→67%と推移してきている。その理由について Q.20 と Q.21 で問うことにする。

Q.19 Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。

- ①とても満足している ②どちらかという満足している ③どちらかという満足していない
④満足していない

<図 16 ILAS セミナー履修者の満足度>

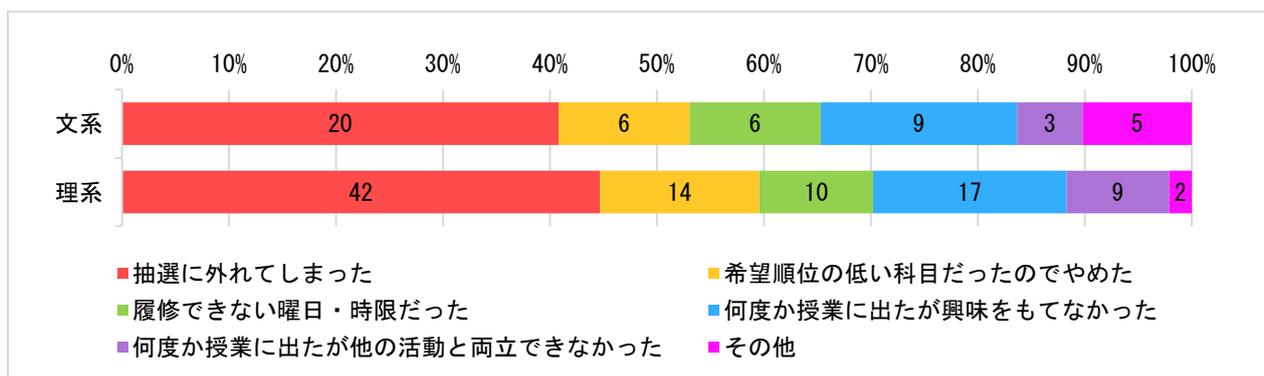


Q.19 では、ILAS セミナーを履修した学生の満足度を尋ねた。図 16 に示したように、「とても満足」と「どちらかという満足」を合わせると 95%の学生が学習内容に満足しており、(少なくとも現在のアンケート形式となった 2017 年度より) ずっと高い水準で推移している。

Q.20 Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。

- ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた ③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった ⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他 (記述回答)

<図 17 ILAS セミナー：予備登録したが履修しなかった理由>

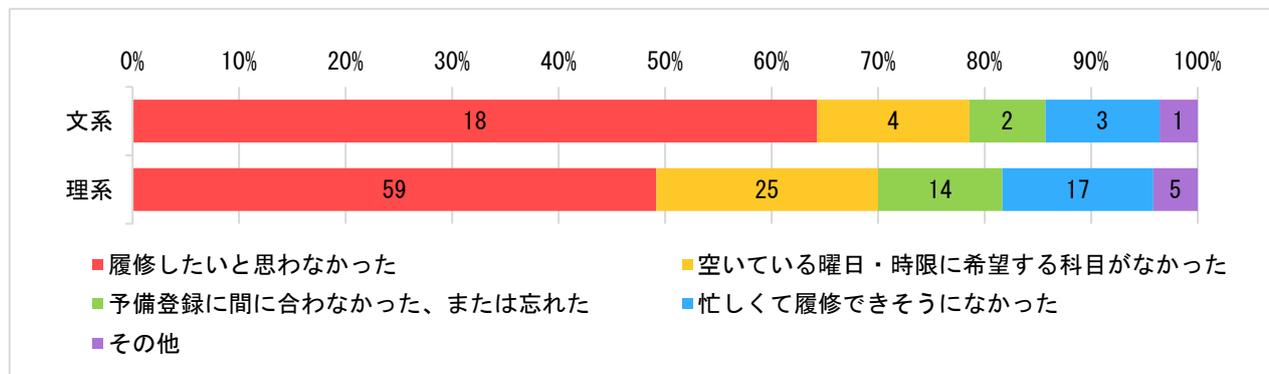


この設問で「予備登録をしたが履修しなかった」理由を尋ねた。回答数が限られるため、年々の変動が大きい結果となっているが、今年も「抽選に外れてしまった」が理由としてもっとも多く、理系文系ともに 40%を超えている。

Q.21 Q.18で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった
- ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
- ③予備登録に間に合わなかった、または忘れた
- ④忙しくて履修できそうになかった
- ⑤その他（記述回答）

<図 18 ILAS セミナー：予備登録をしなかった理由>



* Q20,Q21 の「留学生/その他」の回答は回答数が少ないため、文系・理系に含めている

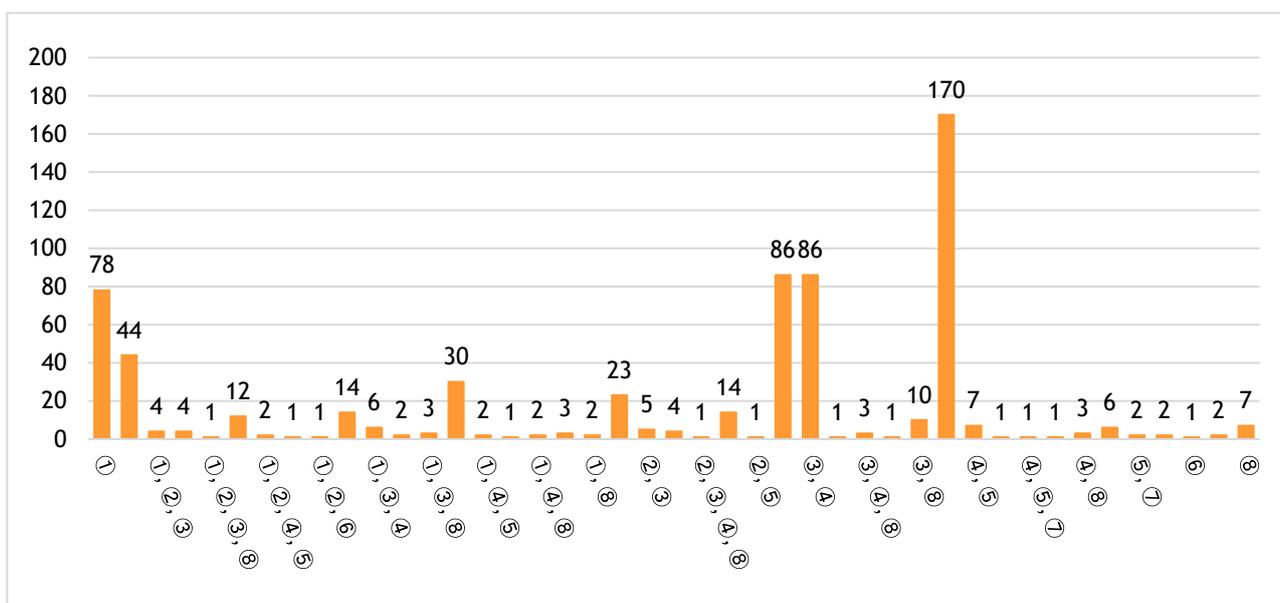
「予備登録をしなかった」学生に理由を尋ねた。やはり回答数が限られているが、毎年ある程度似た結果となっている。結果は、「履修したいと思わなかった」が文系で65%、理系で50%あり、「空いている曜日・時限に希望する科目がなかった」の回答を加えると70~80%になる。Q.18で予備登録をしなかった学生の比率が全体の16%であったことを考慮すると、回答者の約8%はもともと「履修したいと思わなかった」と回答しており、ILAS セミナーそのものに興味をもっていないことになる。

また最近、担当教員の退職等もあり、ILAS セミナーの開講科目数が過去9年間は基本的に減少傾向（前期開講 277→267→265→237→238→245→235→249→247 科目）にある。2022年度からは各部局への協力依頼を積極的に行って、魅力的なテーマのILAS セミナーの継続的な提供をお願いしているところで、若干の回復傾向がでてきたかもしれない。2022年度の第26回全学教育シンポジウムでは、「自律的課題発見・解決を通じて自立を促す少人数教養教育—もっとILAS セミナーを」のテーマのもと、事例紹介や学生インタビューの検証なども含めて現状認識を共有し、近未来の展開を議論した。そして、学生の学びの意欲をいっそう高め精神の自立を促す少人数教育の目玉として、これからのILAS セミナーを企画・実施していくことの重要性を認識した。一昨年度からは「全学共通科目とILAS セミナー」のリーフレットを作成し新入生全員に配布して、新入生の「京都大学での学び」の始まりを支援する活動を開始している。今年度からはじまった統合型複合科目と調整しながら、今後の開講科目の更なる充実を努めることが必要である。

Q.22 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、地球科学実験のうち、1 回生で履修した科目の□欄チェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

- ①スポーツ実習 IA ②スポーツ実習 IB ③物理学実験 ④基礎化学実験
 ⑤生物学実習Ⅰ ⑥生物学実習Ⅱ ⑦生物学実習Ⅲ ⑧地球科学実験

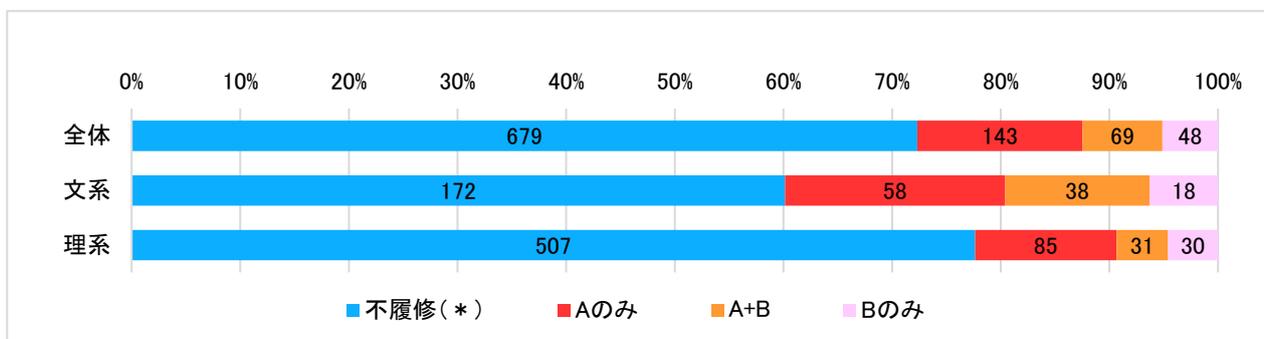
< 図 19 回答数と履修した科目の組み合わせ >



* 参考：いずれもチェックなし 289 名

Q.22 では、スポーツ実習と理系の実験・実習科目の履修状況を尋ねた。それぞれの科目の意義は明確に設定されているが、その意義とは無関係に、学習時間やコマ数の割に単位が少ないという理由で、履修を敬遠するという傾向にある。その実態を調べることが本設問の目的である。

< 図 20 スポーツ実習履修状況 >



(*1) 「Aのみ」には「スポーツ実習 IA」に加え実験・実習科目をチェックしている学生も含む。「Bのみ」「A+B」も同様。

(*2) 「不履修」は本設問にてスポーツ実習にチェックを入れていない、もしくは本設問の科目はいずれも履修していない場合とする。

図 20 で全体平均を見ると、70%強の学生がスポーツ実習を履修していないが、不履修率の過去 8 年間の推移は、61%→69%→59%→83%→69%→67%→69%→72%である。2018 年度から 2020 年度^(*)までは 60%前後で変動していたが、2021 年度はコロナ禍の影響で 80%を超える不履修となり、それ以降は 70%前後を推移している。

次に、理系の実験科目について結果を述べる。まず参考資料は、2017 年度～2025 年度（前期）の実験科目履修者数であり、実験科目全体の実施規模を概観できる。

◆参考資料（履修取消前の数値、カッコ内は取消者数、院生・非正規生を除く）

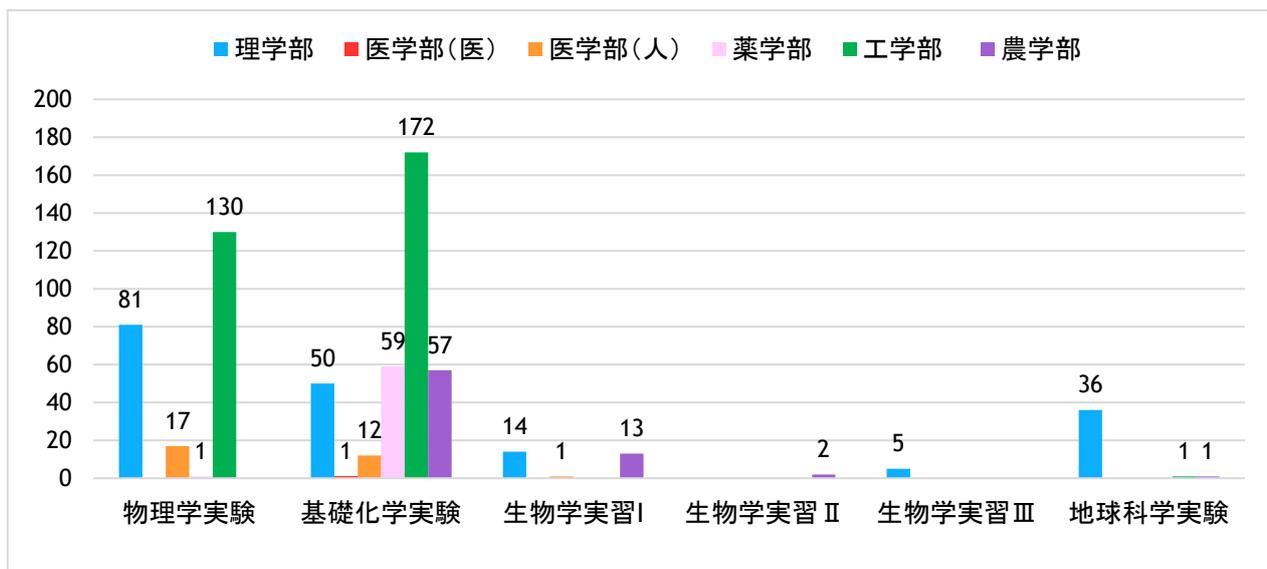
科目名	2017(全体)	2018(全体)	2019(全体)	2020(全体)	2021(全体)	2022(全体)	2023(全体)	2024(全体)	2025(前期)
物理学実験	598(74)	510(47)	603(80)	766(41)	654(27)	608(48)	591(47)	643(49)	292(24)
Elementary Experimental Physics-E2	7	7(1)	11(2)	14(2)	7(3)	5(2)	4	8(1)	-
基礎化学実験	738(15)	724(10)	881(28)	1021(21)	932(11)	947(30)	874(35)	911(30)	448(12)
Fundamental Chemical Experiments-E2	48	48	96(1)	76(1)	77	112(1)	139(2)	124(4)	71(4)
生物学実習I	111(4)	139(3)	114(2)	86(6)	131(3)	138(3)	90(2)	118	79(2)
生物学実習II	19	32	30	19(1)	23	22(1)	22(1)	41	12
生物学実習III	45	50	26(3)	28(2)	38(1)	26	34	25	14(1)
地球科学実験	69(4)	53	85(4)	99(10)	87(2)	83(3)	66(1)	103(3)	46

今年度は前期のみのデータであり、各科目の変動について認識・議論することができない。2021 年度にはコロナ禍の影響があったかもしれないが、年々変動の範囲内である。これまでも、選択必修科目の変更の影響等があったかもしれないが、実験科目履修者数の経年変化傾向を議論するには引き続きデータ収集を継続する必要がある。コストパフォーマンスが悪いという学生意識が履修者減少を招かないようにするためには、各学部・学科のガイダンス等で実験科目の重要性を強調し、分野の特性に応じた履修指導を継続的に行う必要があるだろう。

図 21 は、実験科目を 2024 年度に履修した理系学生の回答数を学部別、実験別に示したものである。一目して分かるように、物理学実験は理と工の学生が履修し、基礎化学実験は、工、理、薬、農などの学生、生物学実習は理と農の学生、地球科学実験は理の学生が履修するという結果である。

^(*) 数値は作成年度ベース

< 図 21 理系学部別実験履修者数 >



7. 履修動向と成績

7.1 単位

単位の実質化の議論において、授業時間ならびに予習・復習・課題等に要する授業外学習時間を十分に確保することが重要である。大学設置基準では2単位授業1コマにつき4時間の授業外学習時間が求められており、そのためには1日に学習する授業コマ数は適切に抑制される必要がある。本学では全学共通科目にCAP制を導入して、2019年度入学生までは原則として上限を30単位と定めていた。しかしながら、全学共通科目に加えて学部により専門基礎科目の履修が課せられていること、集中講義等の制限除外科目があること等から、1回生で70単位以上も取得する学生が散見される事態となっていた。この状況を改善するため、2020年度からは全履修科目の上限を原則30単位に制限する新たなCAP制度が採用されている。この設問ではこの制度の導入による変化を調査した。

Q.23 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50 ⑥50>単位 \geq 45
 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 30 ⑩30>単位 \geq 25 ⑪25>単位

<図 22 取得単位>

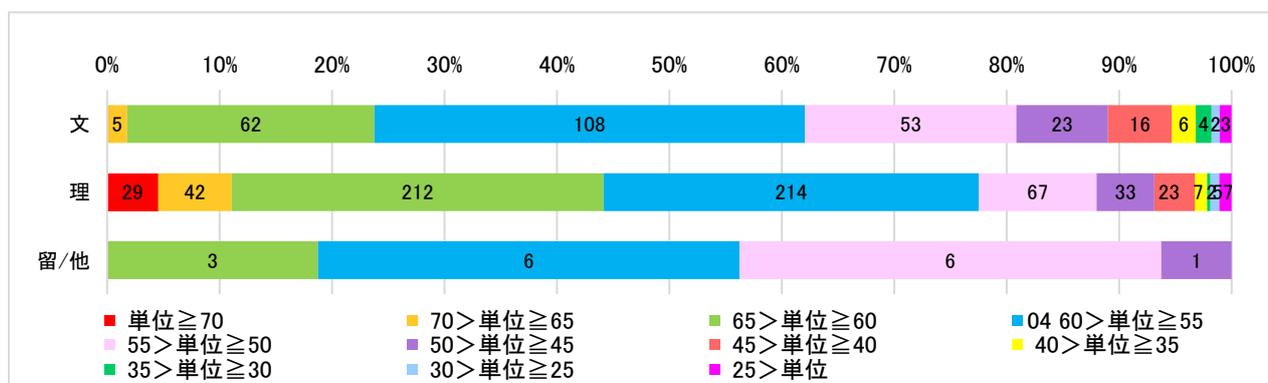


図 22 の全体像では、2020 年度までの傾向と変化が起きている。すなわち、過去 6 年で、文系学部では 60 単位以上を取得した学生の比率が 41%→43%→21%→17%→23%→24%、理系学部では 64%→50%→40%→34%→48%→44%（65 単位以上取得の学生比率では、文系 18%→5%→1%→1%→2%→2%、理系 31%→10%→7%→5%→8%→11%）と減少している。CAP 制度の定着により 1 回生で過剰な単位を取得する状況が徐々に改善されてきていると考えられる。

しかし、本学の多くの学部で卒業要件となっている 138~156 単位（大学設置基準では 124 単位以上）と比較すると、要卒単位の半分ちかくの 60 単位以上を 24~44%の学生が 1 年間で取得するという事態であり、本学の 1 回生は依然として単位取り過ぎの状態にある。これは単位の実質化の要請からも、また標準修業年数 4 年という教育体系から見ても好ましくない状態であり、さらに改善するための対策を取る必要がある。現行 CAP 制度でも 1 回生前期に修得できる単位数を医学で 36 単位、理学で 34 単位と特例が設けられている。また理学では成績優秀者には CAP 以上の単位修得を認めている。さらに集中講義は CAP 対象外としているため、制度が十分に機能していない部分もある。

これまでの記述の繰り返しになるが、各学部で学生の履修行動を把握して、1 回生、特に前期に担当する教養・共通科目や専門基礎科目の種類や要卒単位数等を引き続きご検討いただきたい。2020 年度以降の全学的な CAP 制度導入に伴う動向を把握していただき、1・2 回生のカリキュラム全般について検討を続けられるよう希望する。

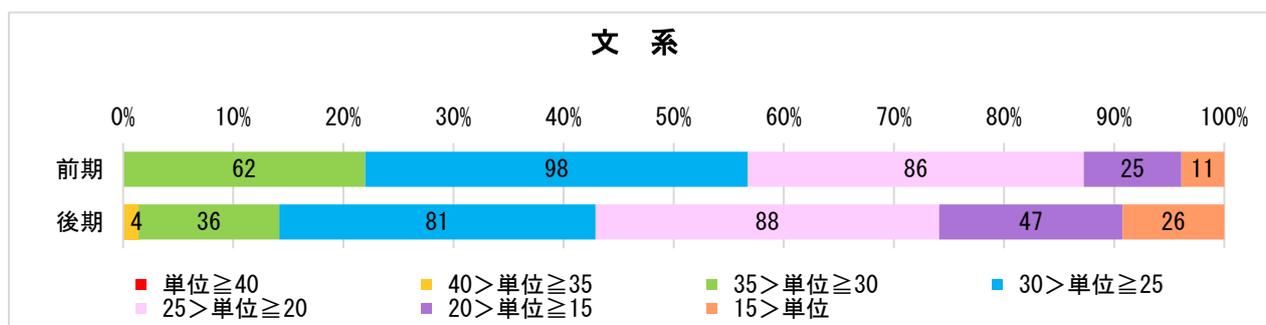
Q.24 Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位≧40 ②40>単位≧35 ③35>単位≧30 ④30>単位≧25 ⑤25>単位≧20 ⑥20>単位≧15
⑦15>単位

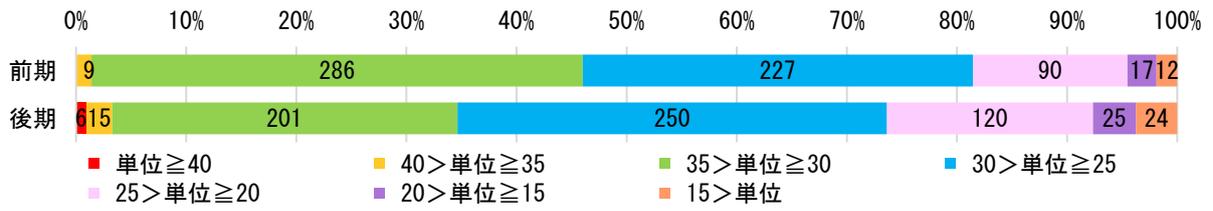
Q.25 Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位≧40 ②40>単位≧35 ③35>単位≧30 ④30>単位≧25 ⑤25>単位≧20 ⑥20>単位≧15
⑦15>単位

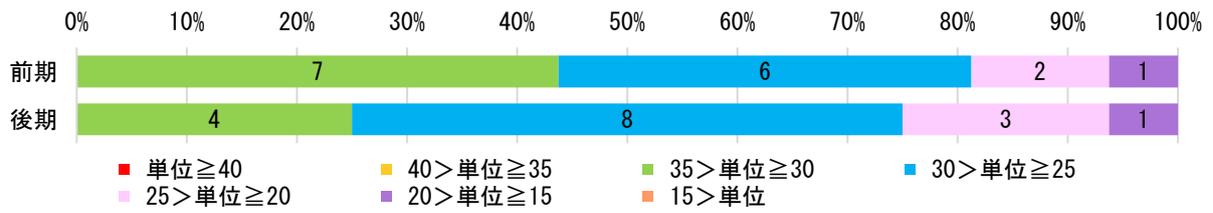
< 図 23 全学共通科目の取得単位 >



理 系



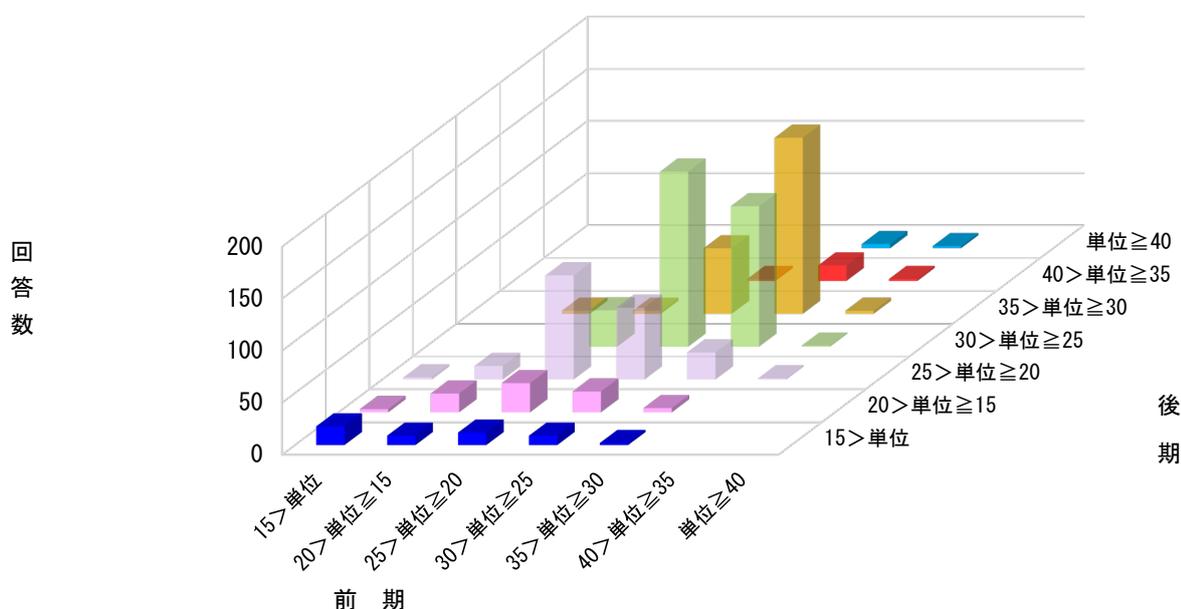
留学生/その他



◇全学共通科目取得単位数の前期と後期の相関

以下本項では、「単位 ≥ 40 」を区分7、「 $40 > \text{単位} \geq 35$ 」を区分6、「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」を区分5、「 $30 > \text{単位} \geq 25$ 」を区分4、「 $25 > \text{単位} \geq 20$ 」を区分3、「 $20 > \text{単位} \geq 15$ 」を区分2、「 $15 > \text{単位}$ 」を区分1とする。

< 図 24 2024 年度の全学共通科目の取得単位・前後期の関連 >



Q.23 に続いて、取得単位の内の全学共通科目の単位数を前期、後期に分けて調査した。

図 23 で文系、理系で比較すると理系の方が取得単位数の多い学生比率が高い。

図 24 では、前期・後期の取得単位数の関連を見ている。上述のように「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」の区分 5 は、CAP 上限を越える区分であるが、それより多い区分 6、7 にも一定数の学生がいる。これは学部による条件の違いや、時間割に現れない集中講義の履修単位の取得によると思われる。図 24 をみると、前期後期とも CAP ぎりぎりの区分 5 の学生、前後期とも区分 4 の CAP をやや下回る学生の 2 つのピークがあり、つぎが前期が区分 5 で CAP ぎりぎり、後期が区分 4 と CAP をやや下回る学生、その次が、前後期とも区分 3 の学生である。このパターンは昨年とほぼ同様である。これらは、CAP 制における典型的な履修行動と考えられる。しかし、これは先に述べたように、早期過剰取得の傾向を示すものであり、各学部の 1 回生カリキュラム履修指導を通して、さらに 2020 年度の CAP 数変更に伴う動向も注視しながら、制度の適正化を進めていく必要があると思われる。

Q.26 1回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.27 1回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

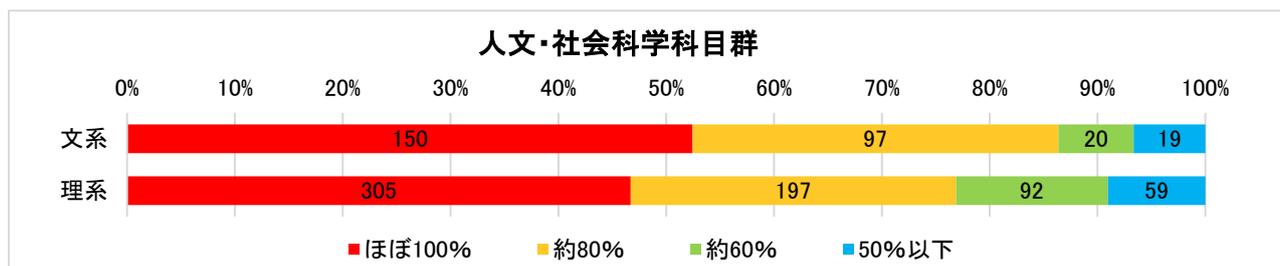
Q.28 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.29 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

<図 25 授業出席率>



4科目群（「人文・社会科学科目群」「自然科学科目群」「外国語科目群・英語」「外国語科目群・初修外国語」）の授業出席率を文系・理系別に記載した。実際に出席回数を計測したのではなく学生本人の回答による集計であることに留意されたい。図 25 は人文・社会科学科目群の出席率を示したものである。授業に付いていくためにはやはり「80%以上」の出席率が必要と考えるが、文系では85%、理系では77%の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

<図 26 授業出席率>

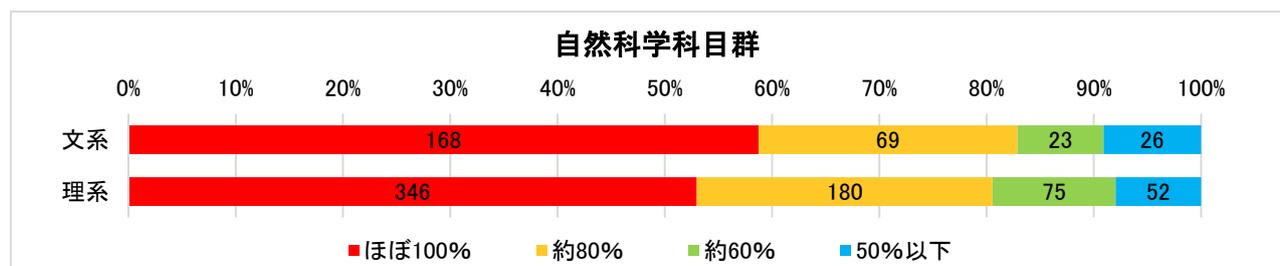
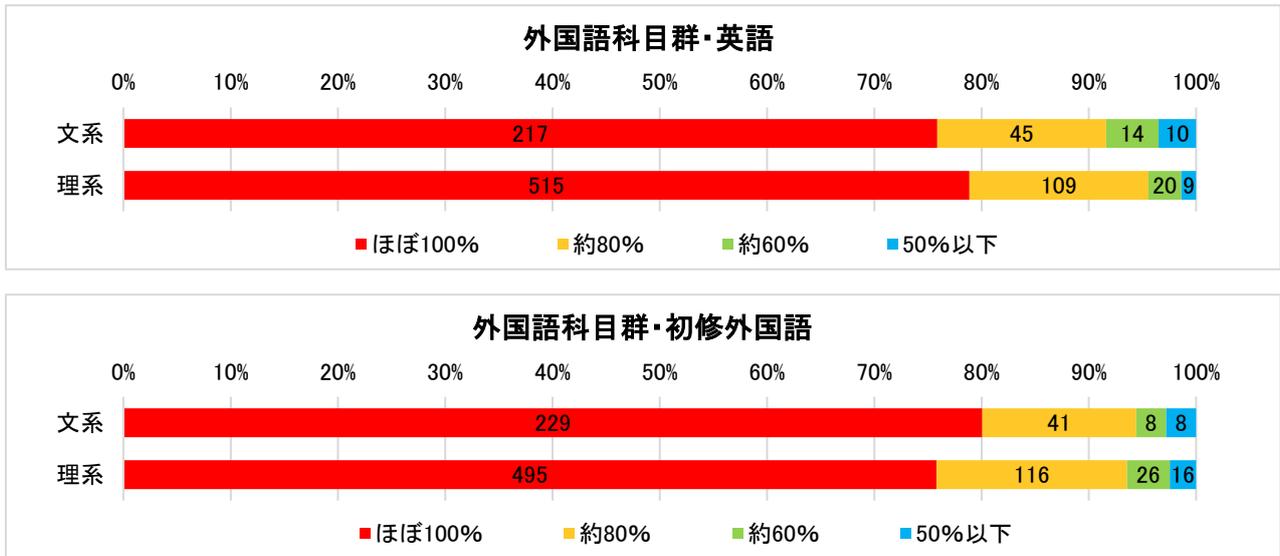


図 25 と同様に、「自然科学科目群」について尋ねたものが図 26 である。結果は文系・理系によらず、80%以上の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

<図 27 授業出席率 上：英語、下：初修外国語>



英語と初修外国語の出席率は高く、「ほぼ100%」と回答した学生の割合が75~80%、「80%以上」では90%を超えている。

このように4科目群で比較してみると、語学科目の出席率は人文社会科目群と自然科学科目群の出席率よりも明確に高い。出席点検や授業内での積極的な参加が求められる語学と、講義形式が多い一般科目との授業形態の差を反映しているものと思われる。教養・共通教育の在り方の議論において参考になる結果である。

Q.30 あなたの1回生（前期+後期）終了時のGPAはどのレベルですか。1回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください（非公開）。

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0 > GPA \geq 3.5 ③3.5 > GPA \geq 3.0 ④3.0 > GPA \geq 2.5 ⑤2.5 > GPA \geq 2.0
⑥2.0 > GPA \geq 1.5 ⑦1.5 > GPA

Q.31 あなたが1回生後期（2024/12/7, 12/21）に受けたTOEFL ITPのスコアはどのレベルでしたか（非公開）。

- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア ⑤受験していない

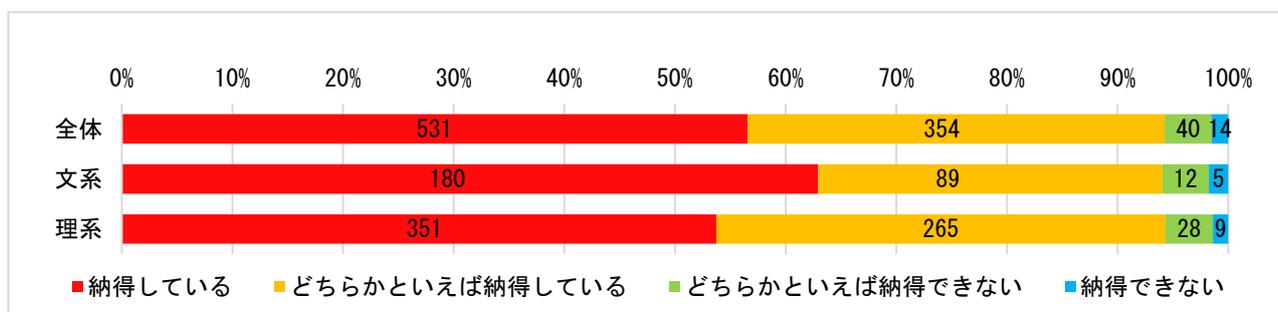
8. 成績評価への納得度

成績評価の納得度については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、肯定的な回答をした学生は文系・理系を問わず95%近くあり、全体として納得度は十分に高いと言える。

Q.32 1回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします：全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している ③どちらかといえば納得できない
④納得できない

<図 28 成績評価への納得度>



<表 3 成績評価への納得度>

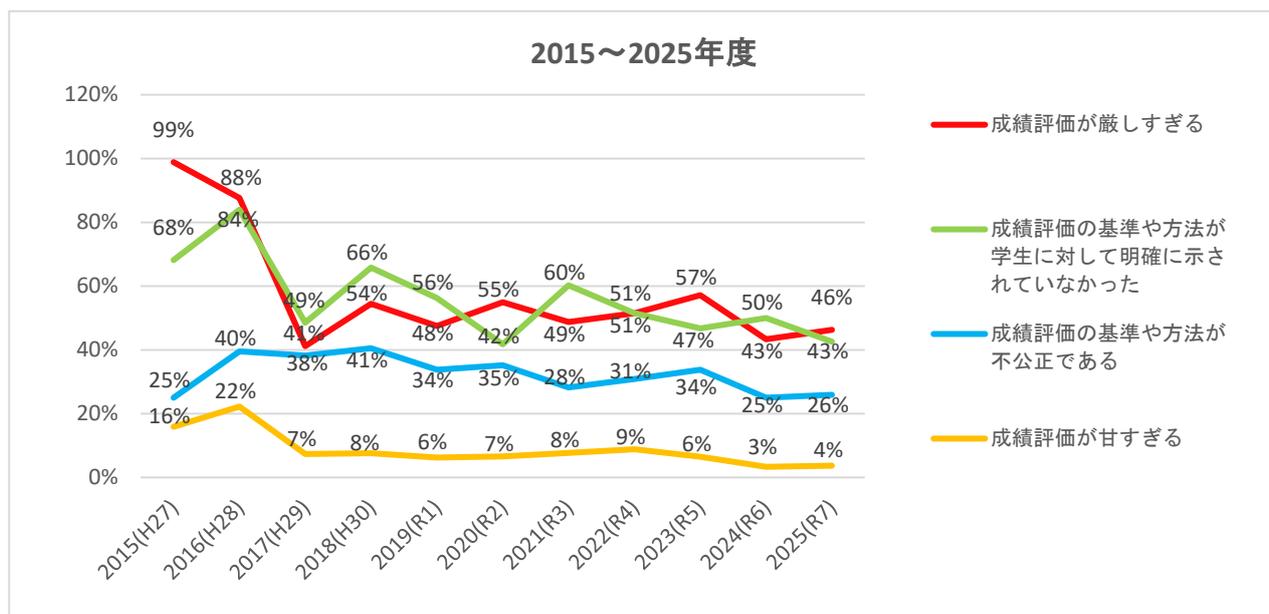
	2005	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
納得している	39%	46%	41%	42%	40%	45%	49%	51%	47%	55%	58%
どちらかといえば納得している	46%	43%	48%	50%	52%	48%	44%	43%	46%	39%	39%
どちらかといえば納得できない	10%	8%	8%	6%	7%	5%	5%	5%	5%	5%	4%
納得できない	5%	3%	3%	2%	1%	2%	1%	1%	1%	2%	2%

この統計を取り始めた初期の頃（2005年度）と、最近の傾向を比較するために、回答における各項目の百分率を表3に示した。今回「納得している」は58%で過去最大であり、「どちらかといえば納得している」を合わせた肯定的な回答も2018年度に90%を超えて以来高い比率を維持している。

Q.33 Q.32で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。

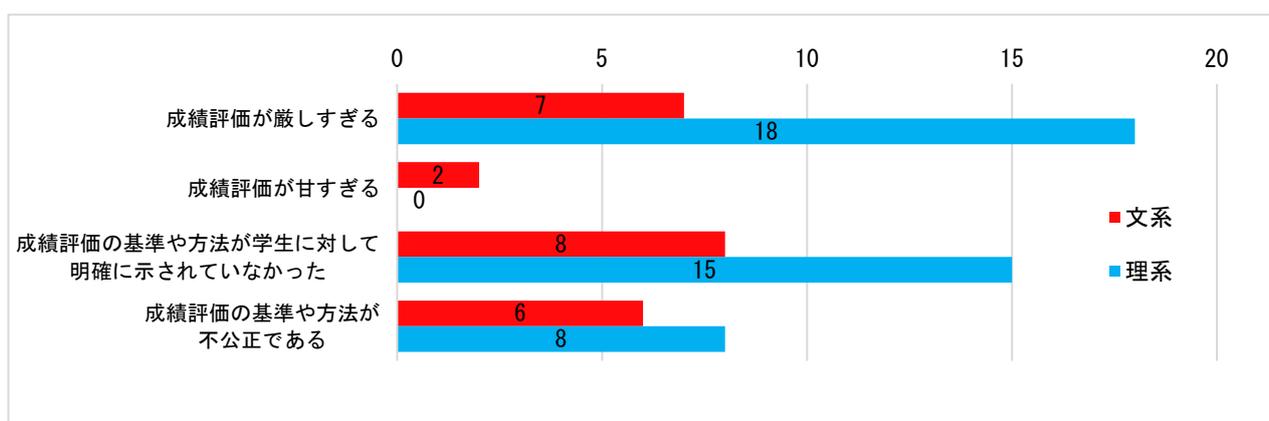
- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他（記述回答）

< 図 29 成績評価に納得できなかった各理由の比率（複数回答） >



Q.33 では成績評価に納得できない理由を尋ねた。この質問は毎年継続して質問している項目である。複数回答を可能にしているので、「どちらかといえば納得できない」「納得できない」回答者数に対する①～④の比率を図示している。2015年度からのデータと合わせて変化を見ると、当初は①の「厳しすぎる」の割合が次第に減少する一方、④の「不公正」と感じる学生の割合が増加していたが、ここ6年ほどはおおよそ一定に落ち着いたように見える。推測であるが、GPAの導入で成績に対する関心が高まり、相対評価としての明確さ、公平さを求める意見が強くなり、高止まりしているのではないだろうか。ただし、回答全体の90%以上の学生は「納得している」と答えており、この項目については回答者のうち約10%の意見であることに留意する必要がある。

< 図 30 成績評価に納得できなかった各理由の回答度数（複数回答） >

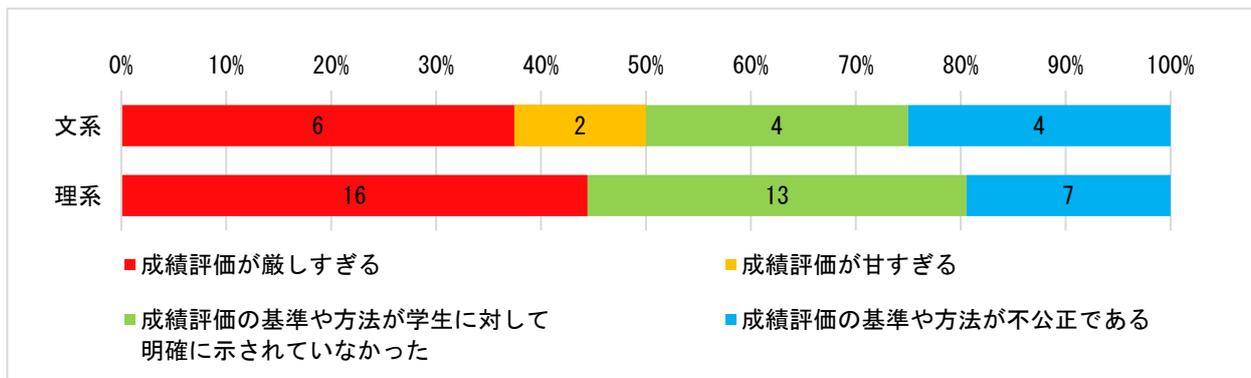


この図では文系と理系で回答度数を表示している。文系理系ともに、①「成績評価が厳しすぎる」と③「基準や方法が不明確」が多く、④「基準や方法が不公正」が続いている。理系の学生の方が相対評価に対する関心がより強く表れているとも見えるが、コース分けや配属などで成績評価が用いられることが多いため、より納得感が高い成績評価を求めるものと推測される。

Q.34 Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの1つを選択してください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他

< 図 31 成績評価に納得できなかった理由（最も重要なもの1つ） >



納得できない理由の最重要項目として選ばれた項目がこの図である。回答数が少ないため年々の変動が大きく、信頼性に欠けるが、単一回答においても先の複数回答と同様に、文系・理系ともに①「成績評価が厳しすぎる」が多く、③「基準や方法が不明確」、④「基準や方法が不公正」がづぎに多いという状況である。

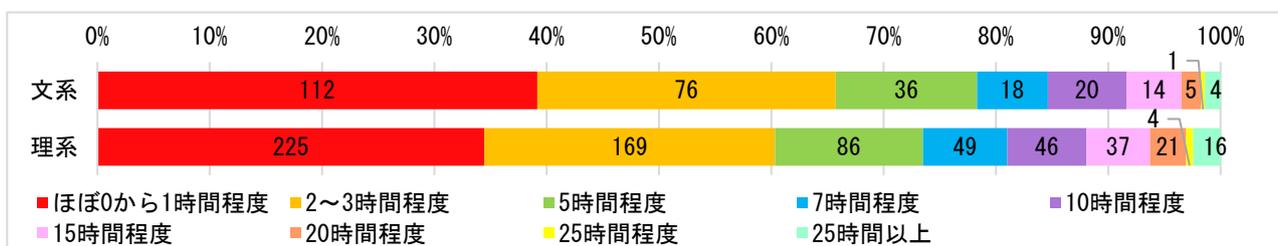
9. 学生生活

学生生活については、運動、授業出席、予習・復習・レポート作成等の時間、読書、クラブ・サークルなど、学生の生活時間全般と GPA などの学習活動との関連を検討した。

Q.35 平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

- ①ほぼ 0 から 1 時間程度 ②2～3 時間程度 ③5 時間程度 ④7 時間程度 ⑤10 時間程度
⑥15 時間程度 ⑦20 時間程度 ⑧25 時間程度 ⑨25 時間以上

<図 32 1 週間に運動する時間>

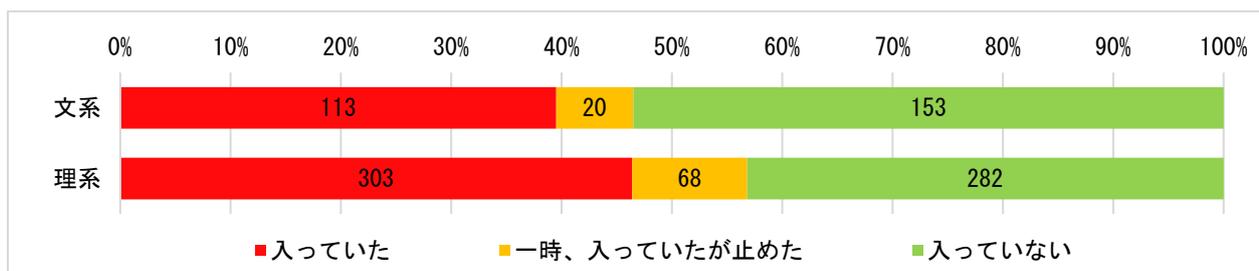


この質問では、1 週間に運動する時間を尋ねた。結果を図 32 に示したが、全体としておよそ昨年と同じ結果である。文系・理系を問わず 35～40%の学生が 0～1 時間程度/週と、ほとんど運動をしていない。Q.22 の回答から明らかなように、正課のスポーツ実習を履修していない学生が 70%近くいること、さらに彼らの 18～19 才という年齢を考えると、あまりに運動する時間が少ないことに驚く結果である。また、25%前後の学生は週 2～3 時間、つまり平均して一日に 20 分程度の運動をしている。週 7 時間以上の学生はおそらく体育系のサークルやクラブに入っている学生と思われるが、その比率はおよそ 25%程度である。

Q.36 あなたは、1 回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

- ①入っていた ②一時、入っていたが止めた ③入っていない

<図 33 運動系のクラブ・サークル>

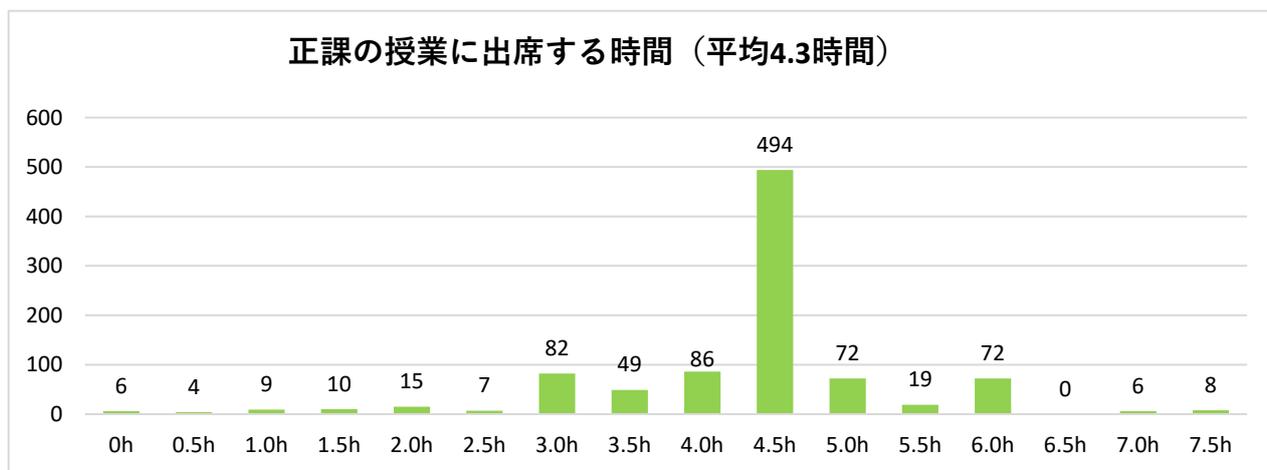


コロナ禍以前はサークルに入っていた学生が約半数いたが、ここ 7 年は 51%→53%→35%→46%→49%→47%→44%と推移してきており、徐々に以前の状態に戻りつつある。

Q.37~Q.42 授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37~Q.42の活動時間を教えてください。

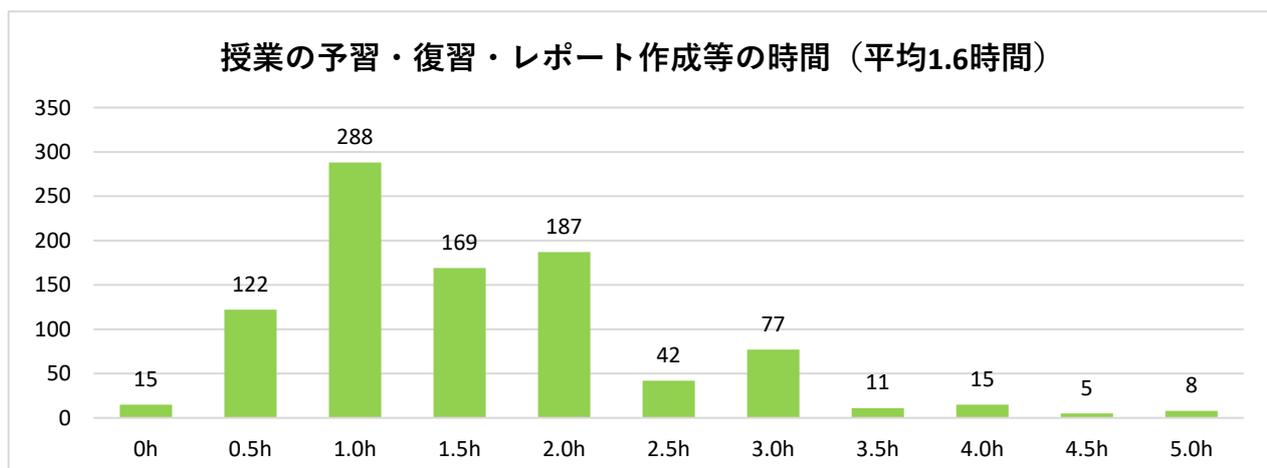
Q.37 <正課の授業に出席する時間>についてお答えください。（1 コマの授業は 1.5 時間です）

<図 34>



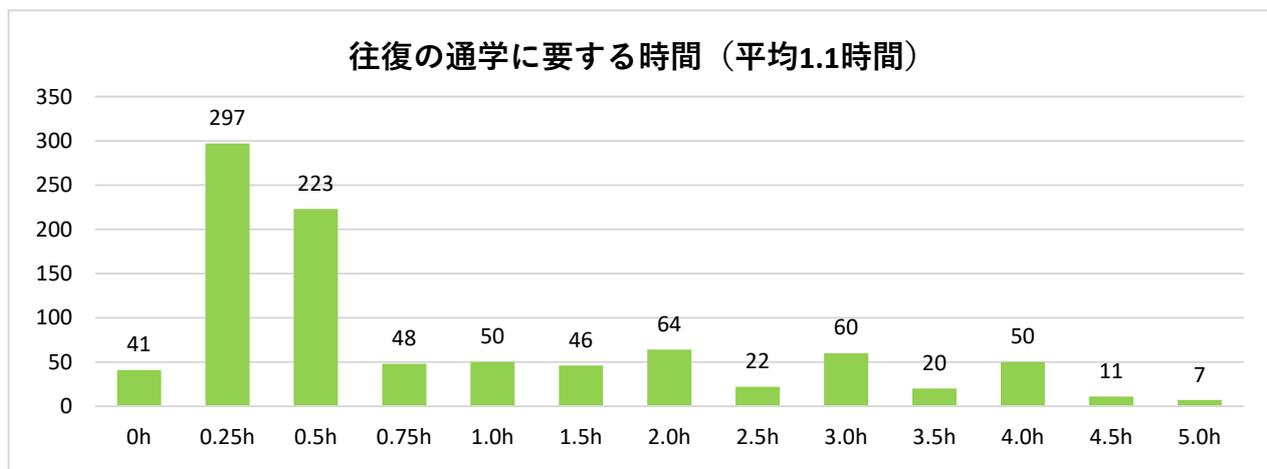
Q.38 <授業の予習・復習・レポート作成等の時間>についてお答えください。

<図 35>



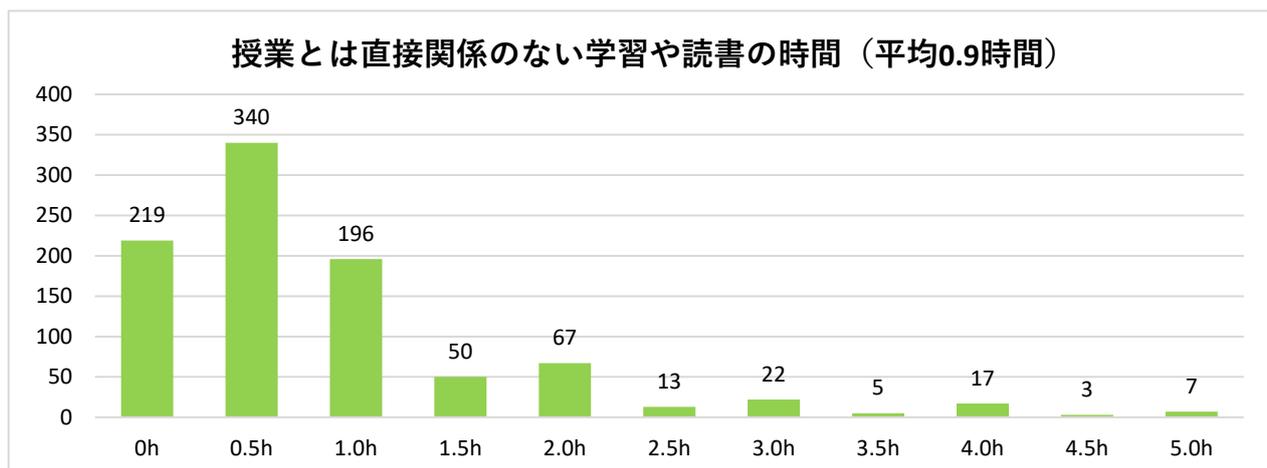
Q.39 <往復の通学に要する時間>についてお答えください。

<図 36>



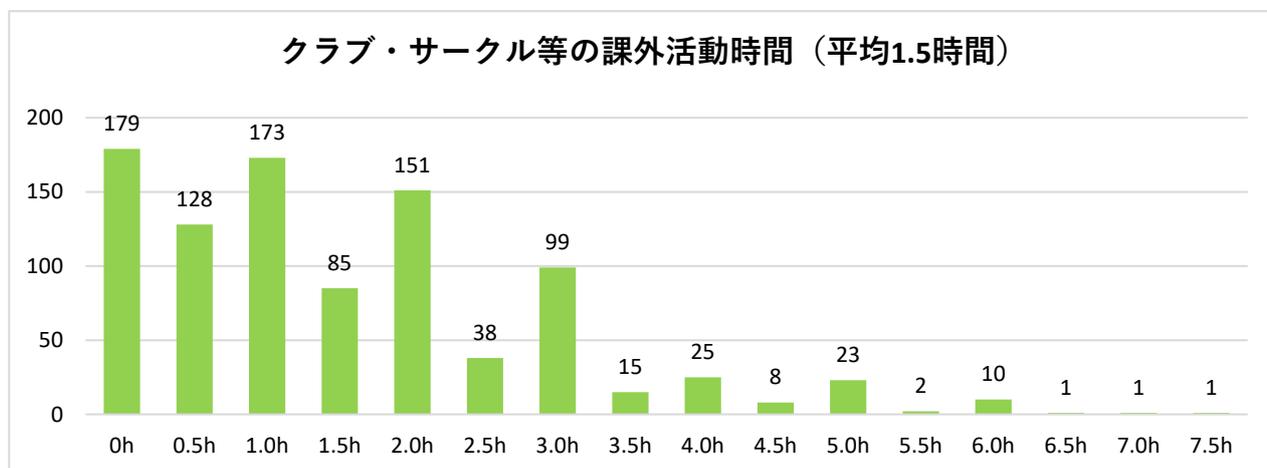
Q.40 <授業とは直接関係のない学習や読書の時間>についてお答えください。

<図 37>



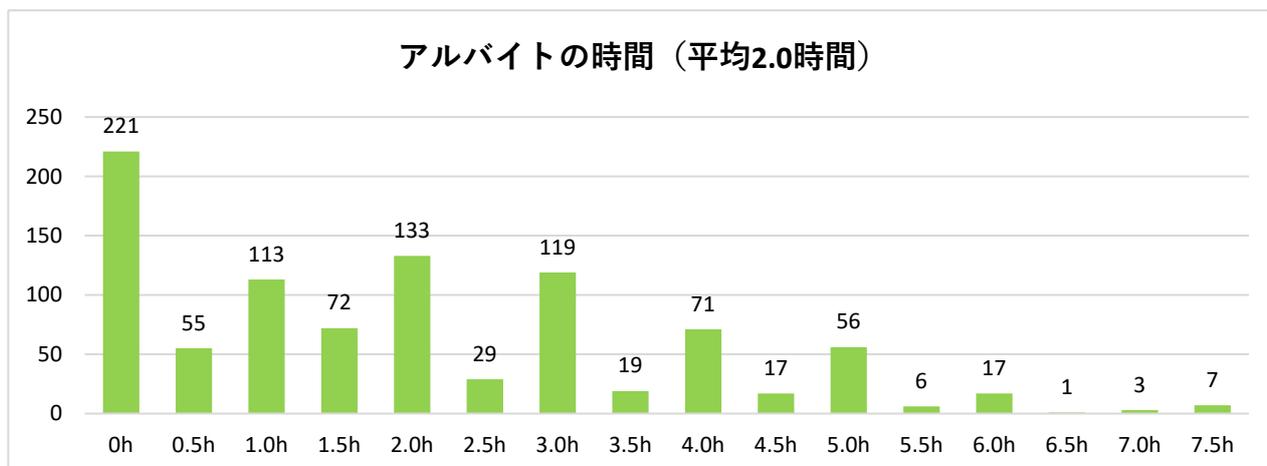
Q.41 <クラブ・サークル等の課外活動時間>についてお答えください。

<図 38>



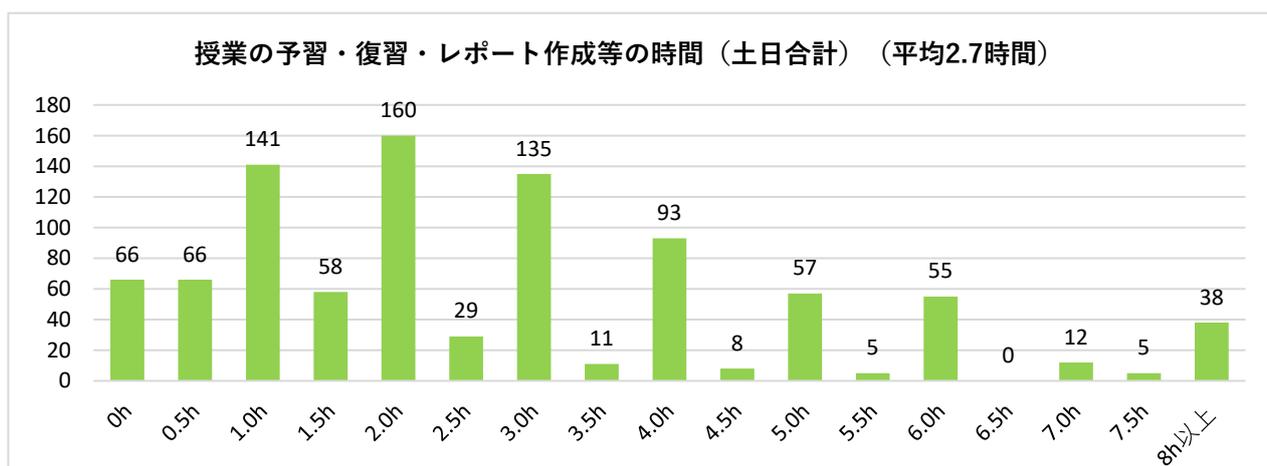
Q.42 <アルバイトの時間>についてお答えください。

<図 39>



Q.43 授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

<図 40>



1 回生がどのように生活時間を配分しているか、学生生活の実態と学習行動との関連を Q.37~Q.43 の 7 項目の質問により調べた。各項目について生活時間の人数分布を図 34~40 に示している。また、表 4 に全体、文系・理系での各項目平均値を示した。

以前の調査では、1 週間当たりの活動時間を尋ね、時間数の記入を求めたところ、不合理な数字が多数入力されたため、2018 年より、質問は学期中の平均的な 1 日（休祝日を除く月曜日～金曜日）での時間配分を尋ねることに変更した。したがって、休日に多いであろう「アルバイト」、「授業とは直接関係のない学習や読書の時間」等については解釈に注意が必要である。また、Q.38 の「平日における授業外学習時間」では測定できない授業外学習時間が残るため、Q.43 では週末（土曜・日曜）に「授業の予習・復習・レポート作成等の時間」に費やす合計時間を尋ねている。以下の図表では、この項目（**）については 1 日当たりの時間ではないことにご注意いただきたい。

<表4 1回生の学生生活時間/日 ()内は昨年の結果>

2024	正課	予習・復習等	通学	学習・読書時間*	クラブ	バイト	週末学習時間**
全体	4.3(3.9)	1.6(1.6)	1.1(1.0)	0.9(0.9)	1.5(1.6)	2.0(2.2)	2.7(2.8)
文系	4.2(3.8)	1.4(1.5)	1.1(0.8)	0.9(1.0)	1.6(1.7)	2.2(2.4)	2.3(2.8)
理系	4.4(3.9)	1.6(1.6)	1.1(1.1)	0.9(0.8)	1.5(1.5)	1.9(2.1)	2.9(2.8)

* 授業とは直接関係のない学習や読書の時間 (平日1日当たり時間に週末学習時間を5分割した時間を加え算出)

** 週末の予習・復習等 (土日の合計であり1日当たりではない)

全体の平均値で2018年度以降の過去8年の変化(コロナ禍影響の2021年度に下線)を見ると、正課4.5→4.4→4.5→4.2→4.2→4.1→3.9→4.3時間、予習・復習1.5→1.4→1.6→2.2→1.8→1.5→1.6→1.6時間、通学1.0→1.1→1.1→0.9→1.2→1.0→1.0→1.1時間、授業とは直接関係のない学習・読書1.1→1.0→1.0→1.1→1.0→1.0→0.9→0.9時間、クラブ1.8→1.9→1.8→1.0→1.4→1.6→1.6→1.5時間、アルバイト2.1→2.1→2.0→1.9→2.0→2.2→2.2→2.0時間、であり、週末学習時間は2.4→2.1→2.7→3.7→3.1→2.8→2.8→2.7時間である。

まず、正課や予習・復習などの項目に着目すると、

- ・正課授業出席時間の1日4.5時間は、1コマ授業を1.5時間として1日3コマに相当している。図34を見ても、4.5hの回答をピークに、3.0h~6.0hの時間帯に集中している。1コマを2単位科目として換算すると1日3コマは週15コマ、年60単位となり、Q.23で約7割の学生が55単位以上取得していたことと整合的である。コロナ禍影響の年を経て、2020年度の新CAP制への変更後に、新たな定常的状态に移行していると思われる。今後の変遷を注視していく必要がある。
- ・単位の実質化の議論でも着目され、かつ成績に影響すると考えられる授業の予習・復習・レポート作成等の時間(授業外学習時間)および、週末の予習・復習等の学習時間(**)は、ともにコロナ禍の影響の1、2年を経て、およそ以前の状態に戻ったと考えられる。新CAP制の効果については、継続した詳細な分析が必要であろう。

ところで、大学設置基準では授業外学習時間として2単位授業1コマ当たり4時間の時間外学習を規定している。前述の1日4.3時間=2.9コマ授業受講が現実とすると、1日11.6時間(設置基準)が要求されることとなり、現実の1日あたり(1.6+2.7/5)=2.1時間とはあまりにも大きな隔りがある。設置基準が非現実的であるということはたやすいが、それにしても授業外学習時間が1コマ授業当たり0.7時間(2.1時間/2.9コマ)程度という現実の値は、大学の授業のあり方を再検討する必要があることを示している。その他の項目についてみると、

- ・通学時間は、文系・理系の学生で差がほとんどなく、コロナ禍以前の状況に戻っている。図36の分布を見ると、多くの学生は0.5時間以内であるが、往復2.5時間以上の長距離通学をしている学生が約18%もいることは、さまざまな企画をする上で留意しておく必要がある。
- ・授業とは直接関係のない学習や読書の時間(*)では、今回は差がなかった。
- ・クラブ・サークルには多くの学生が参加しており、一日あたりの平均時間はコロナ禍の影響を受けた2021年度より1.5倍に増えてきている。図38の分布図を見ると、課外活動時間がゼロを含む2時

間以下の学生が約 76%であるが、3 時間以上が 20%、1 日 4 時間以上もクラブ・サークルに費やす学生が 8%もいる。

- ・ Q.42 のアルバイトの項目では、学生の回答は幅広く分布しており、平均値にあまり意味はないと考えられる。図 39 の分布図から分かるように、アルバイトをしていない実質ゼロ時間の学生が多数いる一方、アルバイトをしている学生群は 1 日当たり 2~3 時間程度にピークをもつ分布になる。1 日 4 時間以上と回答した学生は 178 名、5 時間以上は 90 名であり、それぞれ全回答者数 939 名の 19%、10%になる。この中には経済的に困窮してバイトに追われる学生も多くいると思われるが、このような学生生活では勉学との両立は難しいものと思われる。

次に、Q.09「後期開始時の学習意欲」と学生生活との関連性を調べた。

<図 41 学習意欲と学生生活時間>



図 41 は後期開始時の学習意欲の区分ごとに学生生活時間のそれぞれを図示したものである。正課授業出席時間、授業外学習時間（予習・復習・課題等）に明確な傾向が現れている。すなわち、図 41 では学習意欲の高い群ほどこれらの時間が長く、その和である全学習時間も伸びている。正課授業出席時間、授業外学習時間、全学習時間ともに学習意欲と強く相関している。

図 41 には、「週末（土日）の授業に係る時間外学習時間」(**)も右端に参考として記載した。休日の合計時間であることには注意が必要であるが、学習意欲の各群において、この週末学習を加えた授業外学習の合計時間と顕著な相関がみられる。様々な要素が複雑に作用しているが、上に指摘したように、正課授業出席時間とともに授業外学習時間が学習意欲、学習成績と強く相関していることは明白である。

取得単位数は正課授業出席時間と連動しているので、これらの結果は整合的な傾向を示していると言える。以上をまとめると、

学習意欲の向上 => 予習・復習時間の増加

という流れは確かに成立する。あわせて、

学習意欲の向上 => 授業出席時間（履修科目数）の増加

という流れも成立している。

学生側の意欲に期待するのみならず、予習、復習を含めた学習意欲と行動を喚起する工夫を授業に組入れることが、同じ正課授業時間を使いつつ学習効果を上げる有効な方法と思われ、今後の教育改善の方向性を示唆している。

正課授業出席時間と授業外学習時間を合わせた適切な学習時間については議論が必要である。学習時間が長ければ良いというものではない。多数派の中位群で、1 回生がおおよそ一日あたり授業 4.3 時間 + 予習復習 1.6 時間で合計 5.9 時間学習の大学生活を送り、かつ年 55 単位以上も取得することについて、検討が必要である。質問・回答様式を一定にして、生活時間に関するこれらの項目の推移を長期的に観察する必要がある。

図 41 で学習意欲が下位群になるほど、活動時間全体（棒グラフの長さ）が短くなる傾向にあることも気がかりである（今年度は、最下位群ではクラブやアルバイトの時間が増加して、活動時間全体が少し長くなっている）。以前のこの調査で、1 日の睡眠時間はどの群でも 7 時間程度と一定であったことから、調査項目になっていない時間が長くなることを意味しているのかもしれない。意欲低下、成績下位群ほど実態不明な時間が増えていることは気がかりな点である。

10. 期待の実現度

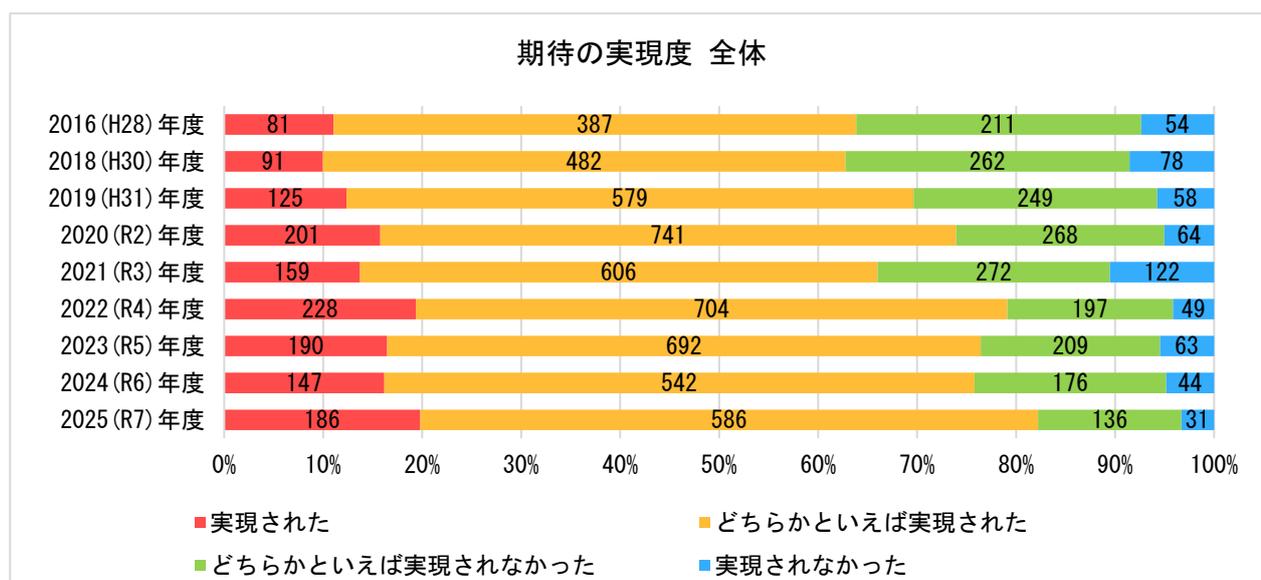
次に、全体的な印象として全学共通科目に対する期待の実現度を尋ねた。2016年度以降（2017年度を除く）、同じ質問をしているので、図42ではその回答の経年変化を見ることができる。全体で今年度（2025年度）の結果を見ると、「実現された」+「どちらかといえば実現された」という肯定的な意見が82%になり、過去9年間で最も高い値になっている。また、文系・理系の内訳をみると、回答数の多い理系の方が全体の変動に近いものとなっている一方、文系は近年、安定して高い値が続いている。

「期待の実現度」は、向上感、達成感、ひいては教養・共通教育の成果に結びつく重要な要素であることから、今後とも注視すべき調査項目である。

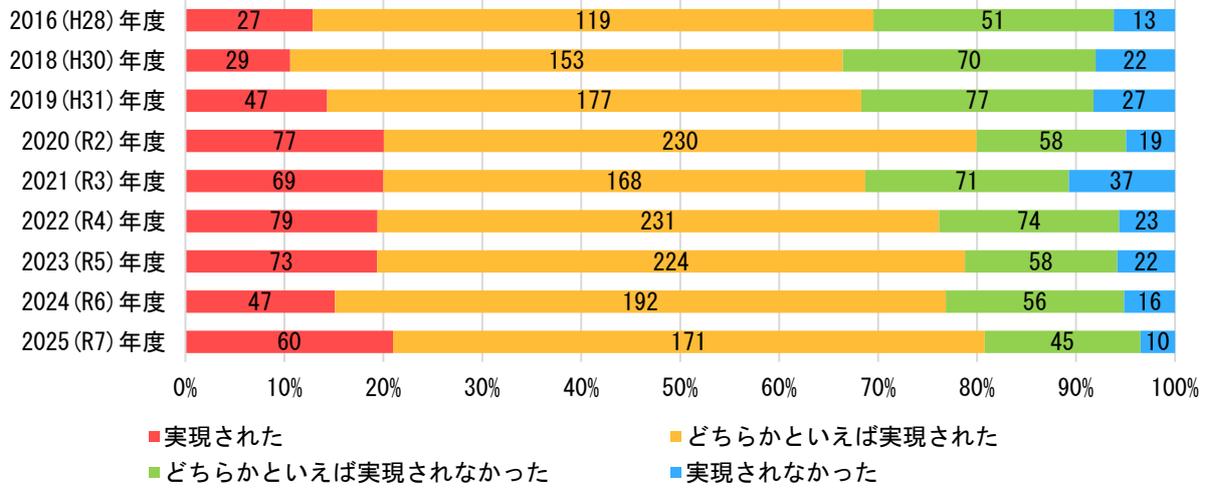
Q.44 全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。

- ①実現された
- ②どちらかといえば実現された
- ③どちらかといえば実現されなかった
- ④実現されなかった

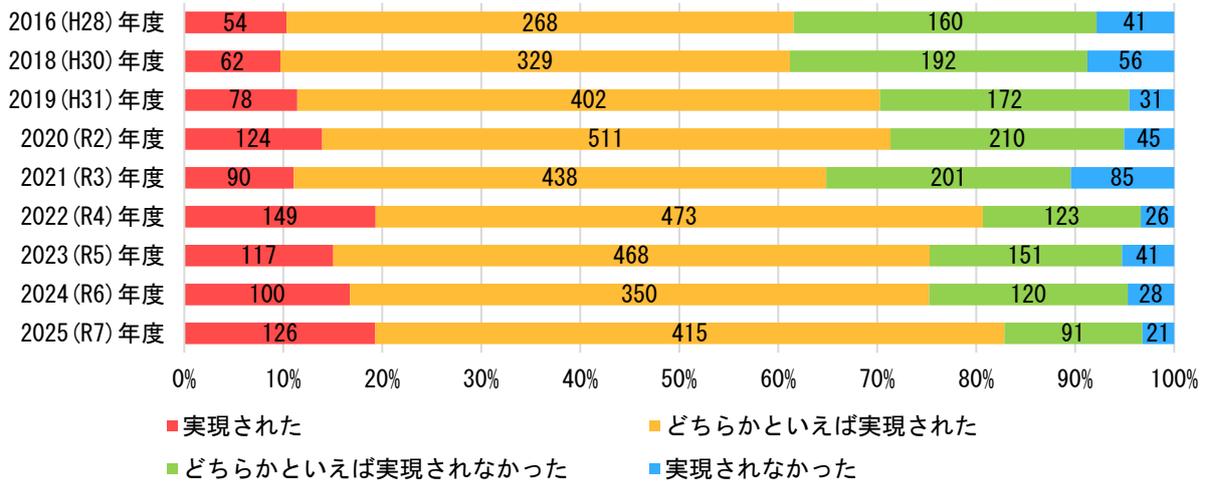
<図42 期待の実現度>



期待の実現度 文系



期待の実現度 理系



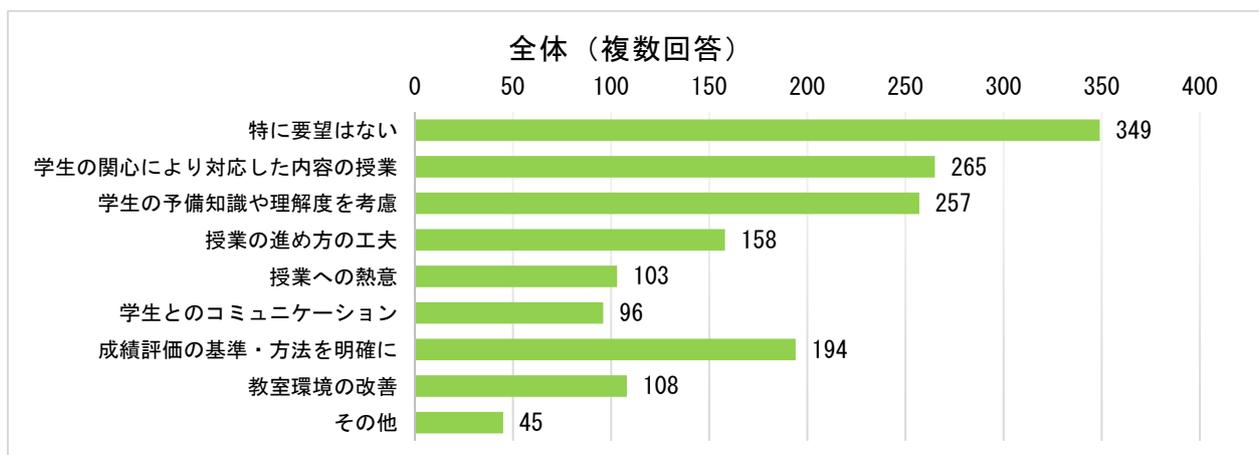
11. 教養・共通教育についての意見

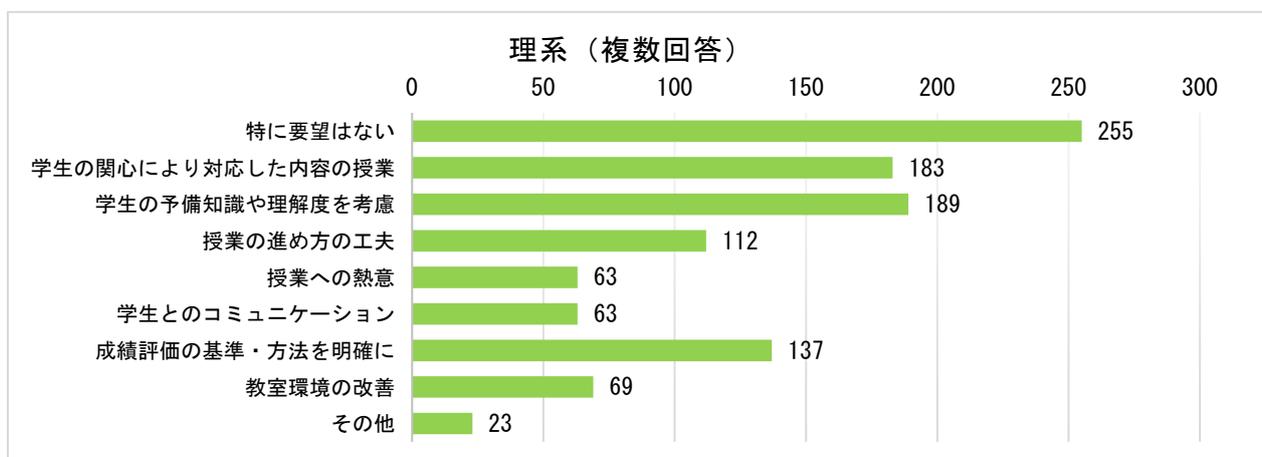
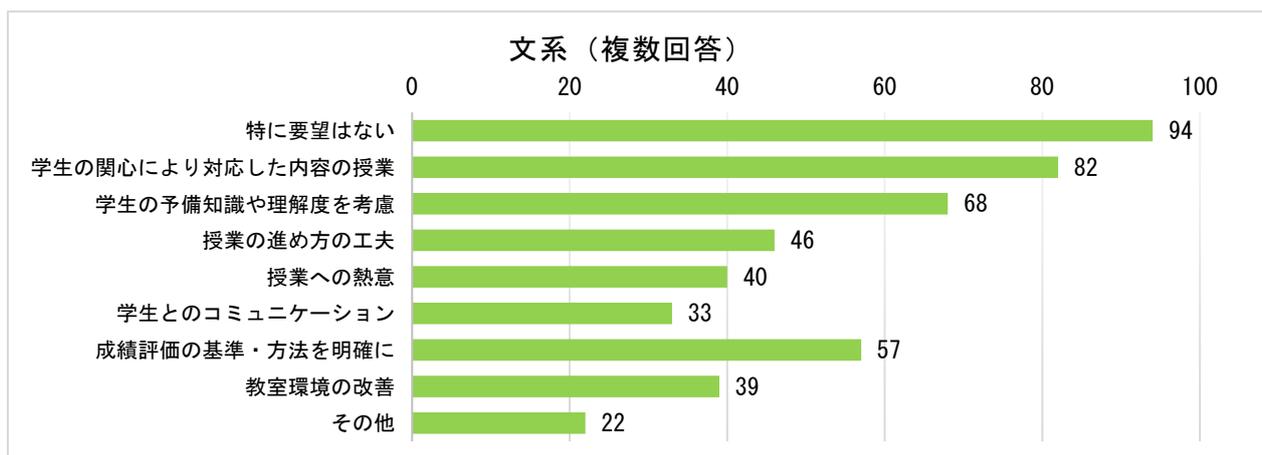
教養・共通教育についての意見の項目についても毎年同じ質問をして、経年変化をみている。ただし、2021年度～23年度に限り⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）の項目を追加した。図43は改善要望を複数回答で尋ねた結果の度数分布を示している。全体としては①「特にない」とともに、②「学生の関心により対応した内容の授業」と③「学生の予備知識や理解度をもっと考慮」が多い回答となっている。

Q.45 今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他 (Q.48で回答)

< 図43 全学共通科目の改善要望（複数回答） >

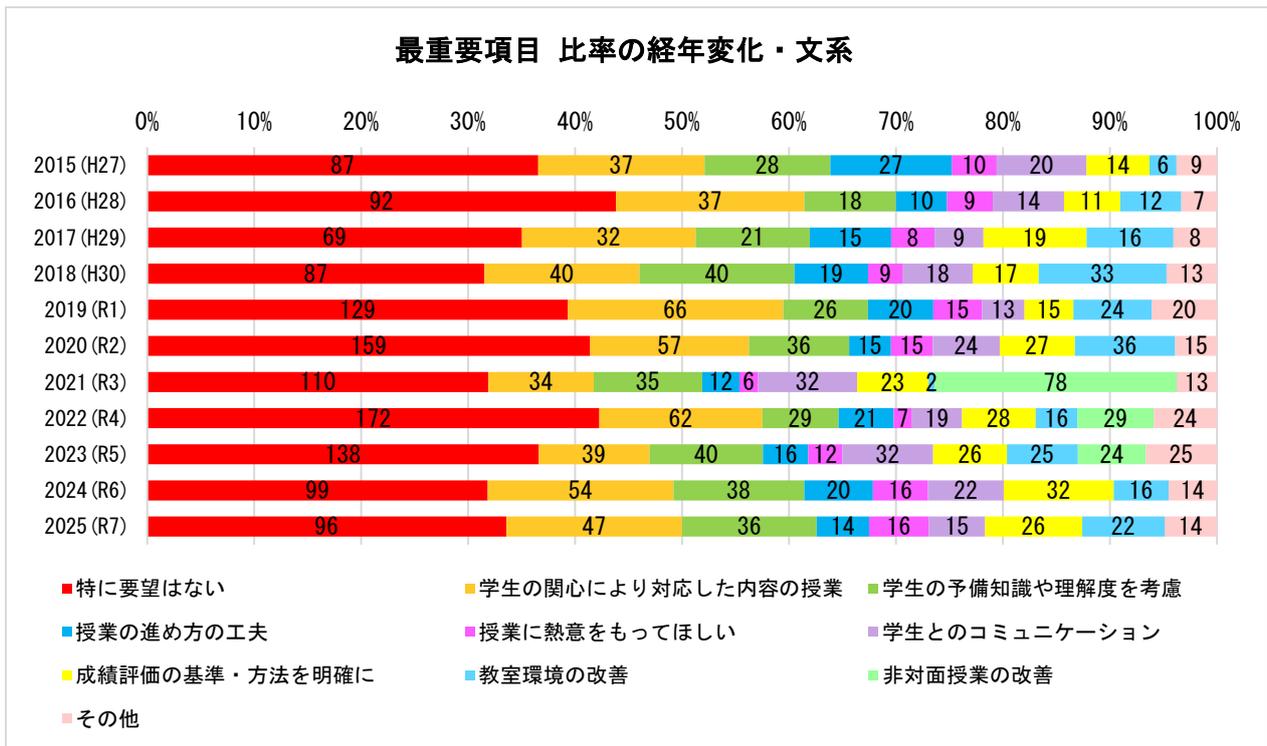
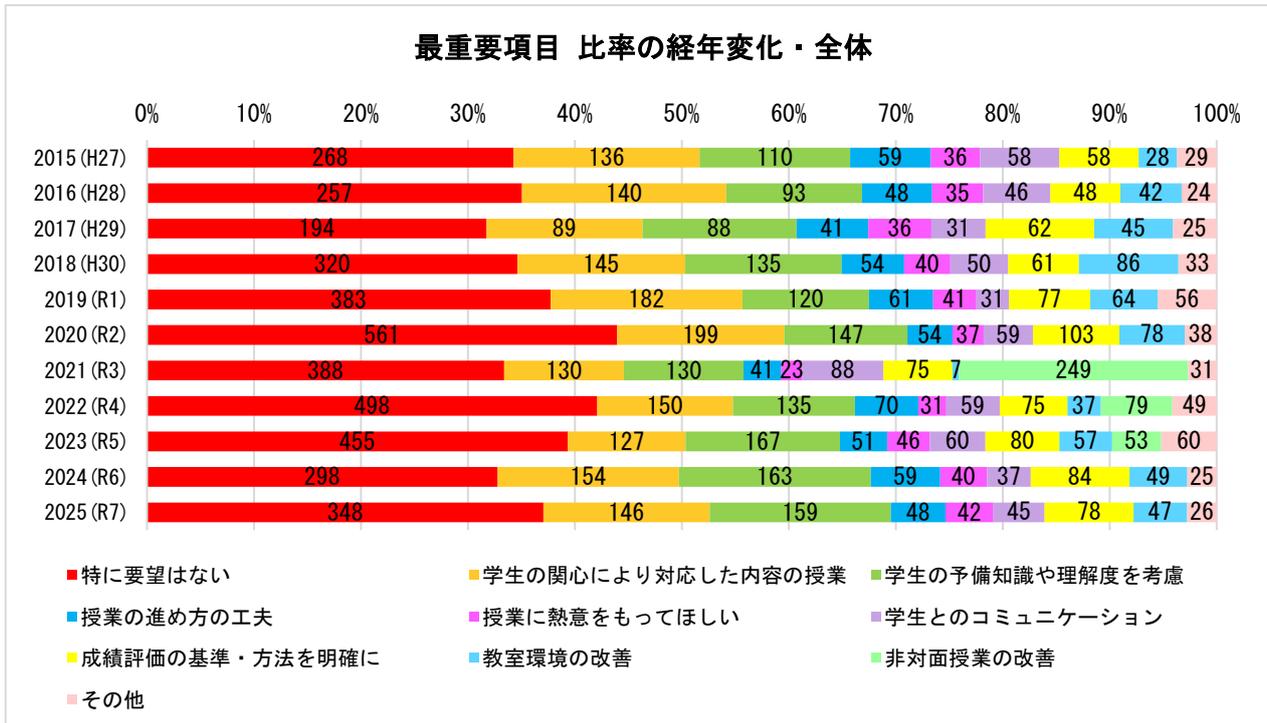




Q.46 Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

- ①特に要望はない
- ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい
- ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい
- ⑥学生とのコミュニケーションをもっとしてほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい
- ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他

< 図 44 全学共通科目の改善要望（最重要項目） >



最重要項目 比率の経年変化・理系

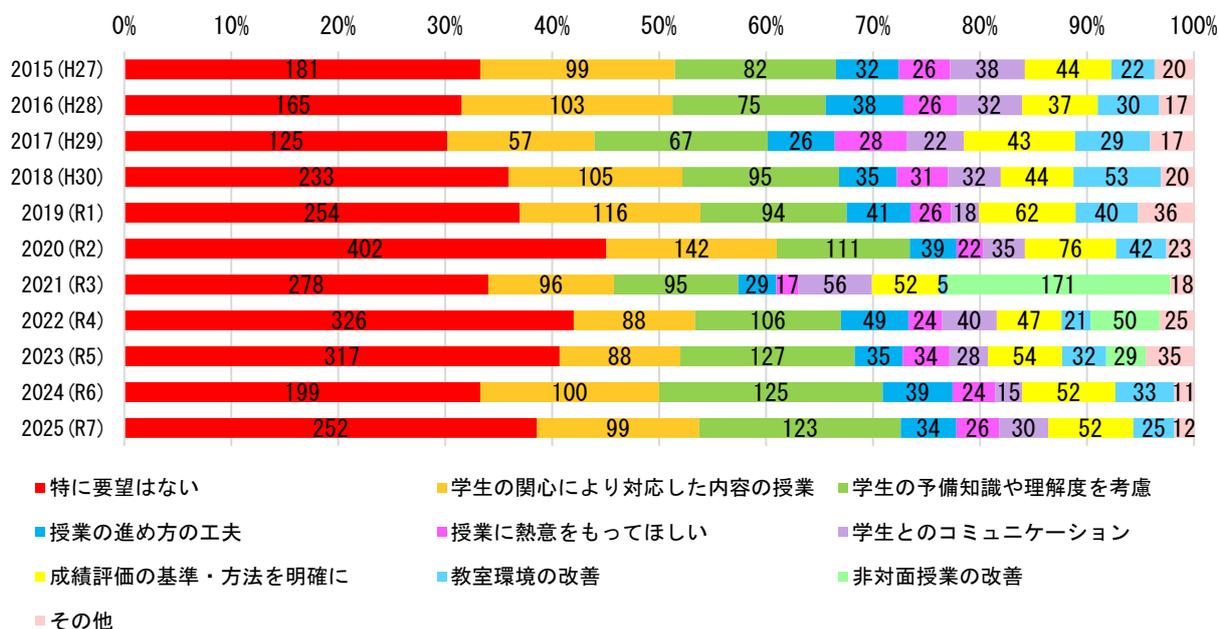
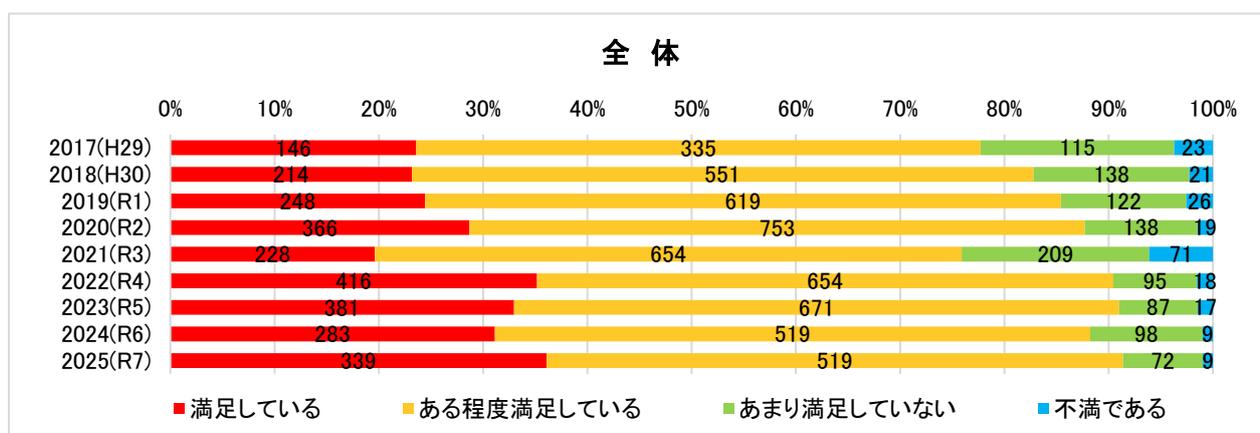


図 44 は、要望の中で最重要な項目と指摘された項目の割合を、2015 年度から 11 年間について図示したものである。全体をみると、「特に要望はない」が 30～40%あたりで増減を繰り返している。2021 年度のコロナ禍の影響を経て、2023 年度以降は、最重要項目として「学生の予備知識や理解度をもっと考慮」が一番多く、次いで「学生の関心により対応した内容の授業」となっている。

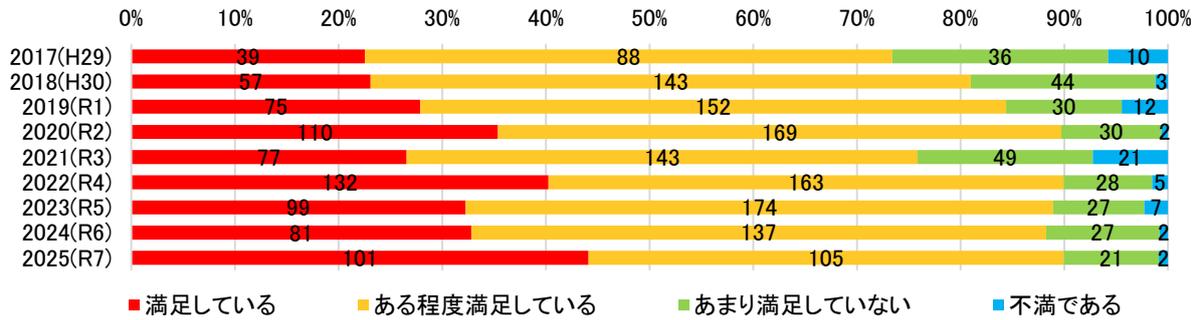
Q.47 この 1 年間に受けた全学共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。

- ①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④不満である

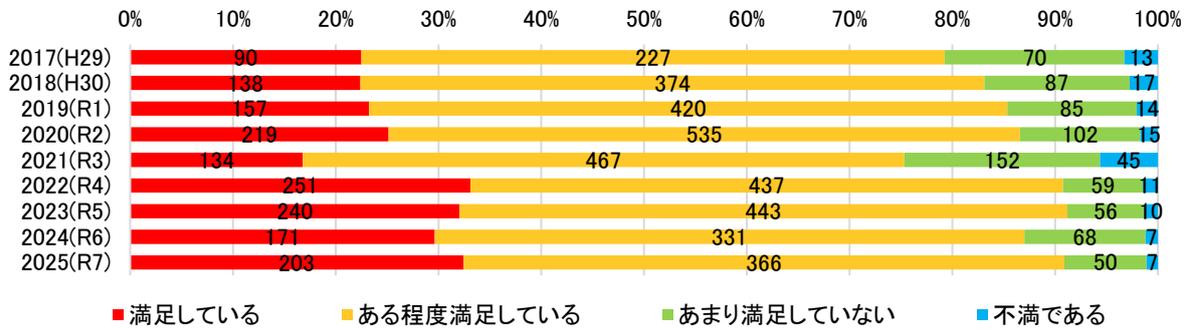
< 図 45 総合的満足度 >



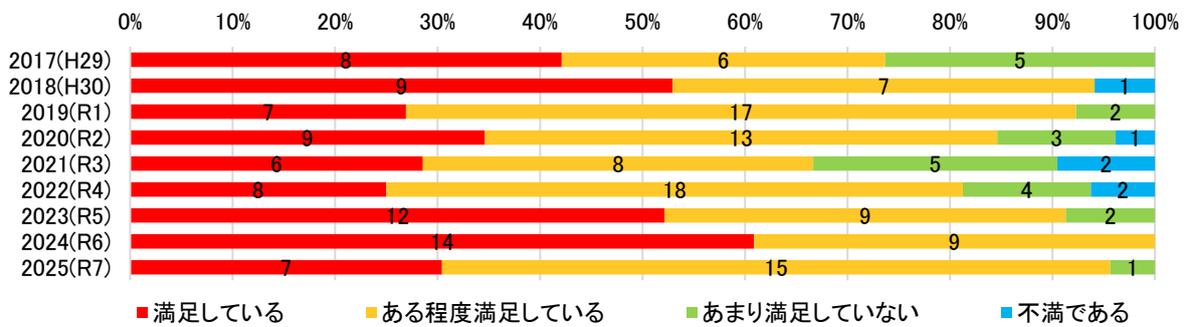
一般入試・文



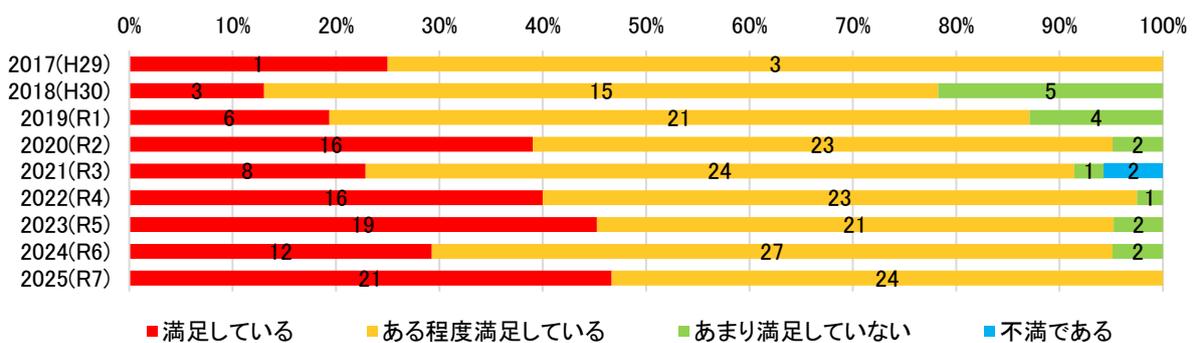
一般入試・理

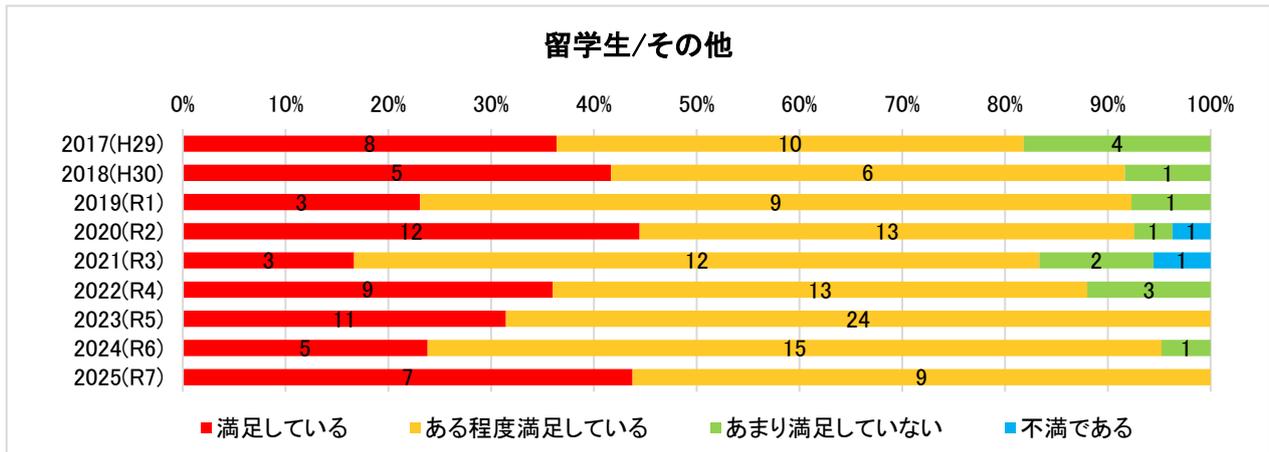


特色入試・文



特色入試・理





アンケートの最後に、1回生の1年間に受けた教養・共通教育を振り返っての満足度を尋ねた。図45には、全体の結果とともに入試区分別に2017年度からの9年間の結果を比較して記載した。コロナ禍の2021年度を除くと、肯定的回答がほぼ増加している良い傾向が続いている。全体では、「満足している」+「ある程度満足している」の肯定的意見が4年続けて90%前後の値となっている。特色入試や留学生の区分では回答数が少なく傾向を把握しづらいが、最近3年間の肯定的意見で見ると文系・理系とも90%を超えるような高い値を示している。

次に、学生の満足度に影響を与える因子を検討するため、他の質問項目との関連を調べて表5に掲載した。この解釈にはいろいろな見方ができるが、高い満足度を与える項目（満足度の全体平均値は2019年度より3.07→3.14→2.89→3.24→3.24→3.18→3.27と推移している）と、関連を調べた各項目で回答①→④（⑤）の高位群→低位群により満足度が明確に減少する項目に着目した。このような観点からすると、「学習意欲」「正課授業時間」が高位の①でもっとも高い満足度（3.47）であり、次いで「一致度」「納得度」の順に、3.42~3.40の高い満足度を示す。これらの項目では、下位の群になるに従って明確に満足度が低下していく。「授業外学習」や「単位」の項目においても、差が小さくなるものの同様の傾向が見られた。

志望に裏打ちされた強い学習意欲が学習行動を伴って満足度に繋がり、高い成績や単位数が結果に対する満足度をもたらすということは予想できるシナリオであるが、続いて「成績評価に対する納得度」も学生が満足感を得るために効果をもつことが考えられる。

学生の意識としては、前章で述べたような2回生進級時の「期待実現度」や本章で述べた「満足度」が、卒業時アンケートにおける全学共通教育での向上感、ひいては大学生活を通じての全学共通教育に対する最終評価に繋がるものと思われる。これらについては、今後も重要調査項目として継続して注視し、分析を続けていきたい。

$$\text{満足度の平均値} = (4 \times \text{①満足している} + 3 \times \text{②ある程度満足している} + 2 \times \text{③あまり満足していない} + 1 \times \text{④不満である}) / \text{全回答者数}$$

<表5 各項目の分類①～④ (⑤) 毎の満足度の平均値>

	志望 Q.04	一致度 Q.06	意欲 Q.09	単位 Q.23	納得度 Q.32	正課授業 Q.37	授業外学習 Q.38
①	3.29	3.42	3.47	3.39	3.40	3.47	3.39
②	3.33	3.20	3.31	3.32	3.13	3.30	3.34
③	3.21	3.03	3.20	3.33	2.98	3.32	3.16
④	3.09	2.96	2.97	3.29	2.43	3.15	3.11
⑤			2.33	3.01		2.86	3.07

注) 満足度の平均値は 3.18、表中①～④ (⑤) の回答群の意味は以下に記載の通り

Q.04 志望 (現在) (①: はっきり決めている、②: 大まかには決めている、③: いくつかあったが、どれとは決めていない、④: あまり決めていない)

Q.06 一致度 (現在) (①: よく一致している、②: まあ一致している、③: どちらかというとは一致していない、④: あまり一致していない)

Q.09 意欲 (後期開始時) (①: 非常に意欲あり、②: まあまあ意欲あり、③: どちらともいえない、④: あまり意欲なし、⑤: まったく意欲なし)

Q.23 単位数 (①: 単位 \geq 65、②: 65 > 単位 \geq 60、③: 60 > 単位 \geq 55、④: 55 > 単位 \geq 50、⑤: 50 > 単位 \geq 40)

Q.32 成績納得度 (①: 納得している、②: どちらかといえば納得している、③: どちらかといえば納得できない、④: 納得できない)

Q.37 正課授業時間 (①: 6.0h 以上、②: 5.0～5.5h、③: 4.5h、④: 3.0～4.0h、⑤: 2.5h 以下)

Q.38 授業外学習時間 (①: 3.0h 以上、②: 2.0～2.5h、③: 1.5h、④: 1h、⑤: 0.5h 以下)

12. まとめ

2 回生進級時アンケートは、入学後 1 年間の大学生活を経て、学生がどのような学習を行い、どのような意識をもっているかを把握して、教養・共通教育の改善・充実に役立てることを目的としている。これまでのアンケートの項目を継承して経年変化の追跡を可能にしなが、入試種別、学部別の解析群を設定し、全学、文系、理系の区分の他、必要に応じてより細かな解析区分を採用することにより、結果に影響した要因についての手がかりを得る形式にしている。また、アンケート結果の解析においても、教育改善のためのデータを得るという観点を強く意識した上で行っている。毎年結果は、多くの点で共通の傾向を示しており、学生の学習動向や生活実態は短期間で大きく変化することは少ない。しかし、2016 年度以来の CAP 制の導入・変更や英語教育の改革^{〈**〉}などに伴う学習行動や意識の変化傾向を把握することは、今後を予測するために重要であり、それにも増して、教育的な問題点を把握し、さらなる改善のきっかけを掴むために重要である。

COVID-19 感染症の世界的流行による非対面授業への移行などを通して 2021 年度以降のアンケート調査結果は多くの項目で影響を受けており、その概要は 2022 年度の報告書にまとめたとおりである。2023 年度以降の結果はどの項目も概ね以前の状況に戻っており、本報告書では感染症関連の影響評価の記述を省略している。それらに関しては 2022 年度の 2 回生進級時アンケート報告書（京都大学国際高等教育院紀要第 6 号；2023）を参照していただきたい。

アンケートの設問をする段階で想定していたように、

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖は、今回の結果を見ても成立している。教育効果の向上を図るためにはこの望ましい流れを維持・強化する施策を講じるとともに、問題点を早期に把握して負の連鎖に転じる兆しを未然に防ぐことがもめられる。本年度のアンケート結果からは、次のような点を指摘できる。昨年度までと共通の点が多いが、次に整理して示す。

- ・ 入学時、将来活躍したい分野（希望分野）の志望意識については学部により大きな差があるが、入学後のさまざまな経験から次第に自身の将来像が明確になる傾向が見られる。それに伴い志望意識と専門分野との一致度も次第に向上している。しかしながら入学後の学習意欲の低下は依然として深刻である。各学部で教育体系、カリキュラムの再点検が行われるとともに、将来に向けたキャリアパスや学習の動機づけとなる情報を、入学前のみならず入学後にも学生に対して積極的に提供することが必要である。

〈**〉 2016 年度 CAP 制導入（多くの学部で 1 学期に履修登録できる単位数の上限が 34 単位）と 2020 年度からの変更（全学共通科目と学部科目をあわせて、1 学期に履修登録できる単位数の上限が 30 単位）；2016 年度 E 科目制度の導入と外国人教員の採用（2020 年度には 100 人に）

- ・特に新入生にとって、生活環境や大学での学び方が激変し、各学部での履修指導ガイダンスや 1 回生前期のカリキュラムが、学習意欲に強い影響を与えていることが推測される。今年度の調査でもすべての学部で 2 回生進級時の学習意欲に回復がみられたことは好ましい傾向である。各学部で進級時ガイダンスに力を入れていただいた効果と推察している。
- ・教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」「専門分野で基礎となる学力」「主体的に行動する能力」の向上感に対する肯定的意見が全体として 80%を超え、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」が 75%と高い割合であることは好ましい結果である。これらの項目では学部差が大きいものもあり、各学部のカリキュラム構成の影響もあると思われる。また、「コミュニケーション能力」の向上感の肯定的意見は 68%であるが、学部によるばらつきが大きい。
- ・これらに対して、「英語の能力」の向上感の肯定的意見は前年度の 36%から 43%に上昇したもの依然として課題の残る水準である。E 科目制度の導入、外国人教員による英語による授業等、英語教育の改革が進められてきたが、2016 年度改革以降の向上感の増加は限定的である。ここでもう一度教養・共通教育の英語科目カリキュラムを見直して、英語への関心や英語に触れる機会を増加させることにより、向上感・満足度が得られる仕組みをさらに検討することが必要である。
- ・ILAS セミナーは例年高い評価を得ている。すでに、全学の教員の協力を得て、2025 年度の前期は 247 科目が開設されているが、全体の約 2 割を占める英語科目 ILAS Seminar-E2 を含めて、今後はより新入生に魅力あるテーマを設定するよう努めていくことが大事であろう。また、予備登録をしたが履修しなかった、あるいは、そもそも予備登録をしなかった学生がそれぞれ約 15%いるので、入学時に「京都大学での学び」の始まりとしての ILAS セミナーをアピールし、少人数教育の意義を理解してもらう必要がある。新たな少人数教育の試みである統合型複合科目とともに、新入生向けパンフレットやセミナー紹介動画、講師向け授業実践ガイドなどを作成・配布して、学生の履修を増やしていく努力を続けたい。
- ・2020 年度から強化された CAP 制度の定着により 1 回生で過剰な単位を取得する状況は徐々に改善されてきているが、要卒単位の半分近くの 60 単位以上を文系 24%、理系 44%の学生が 1 年間で取得するという事態であり、依然として単位を取り過ぎの状態がみられる。卒業単位数、標準修業年数からみても問題があり、カリキュラム、要卒単位、および、履修指導の再検討が必要である。大学機関別認証評価においても、「履修登録科目に関する単位の上限の設定（CAP 制）等について、適切であるか」が問われているように、各科目で学生自ら考察を深め、授業で得た知識を定着させる学習時間の確保が求められている。
- ・かねてから言われているように、授業外学習時間が 2 単位授業 1 コマ当たり 0.7 時間と大学設置基準の 4 時間に比べて明らかに不足している。受講科目数や取得単位数を過度に増やすことよりも、自ら学ぶ姿勢を喚起する授業を推進することが、教育の量から質への転換を促し、教育効果を上げる道筋に

なると考えられる。

- ・成績評価への納得度について、評価基準の透明性、公平性をもとめる声が、特に理系学生で大きい。成績評価の方法を明示し、クラス間・科目間の不公平感を改善することが求められる。これは GPA 制度の導入が教育改革に資するとされた主要な論点の一つである。このことを改めて認識する必要がある。
- ・学生生活では、運動時間が不足している学生が多く、健康管理について新入生ガイダンス等でより強くアピールすることが必要である。また、本学の運動施設や環境は貧弱と言わざるを得ない。一般学生が手軽に運動を楽しめる環境の整備が望まれる。
- ・全学共通教育への総合的満足度について、今年度は高い満足度を与える項目として、「学習意欲」と「GPA（成績）」のみならず、「希望分野と専門分野の一致度」「成績評価への納得度（信頼性）」「正課授業時間」などが影響している。教育改善の議論においては、成績評価への納得度という視点にも注意を払うべきである。
- ・Q.48 で述べられた改善要望において、履修登録、定員制限と抽選についての意見が多数寄せられた。教育効果を考えるとクラスサイズが過大にならないように一定の定員を設けることは避けられないが、不満を招く一つの大きな要因は、いわゆる楽勝科目という風評により履修希望者が一部科目に殺到し、本当にその科目を受講したい学生が履修できないという事態にある。各授業の到達目標の設定と成績評価の在り方、授業外学習の組み入れ等、教育システムとしての問題点を全教員が共有し、共通の認識の下に改善に取り組むことが求められる。また、学生に対して施策の意図を伝えて理解を得る努力が求められる。

また、担当教員による授業の質や評価の差異について、多くの指摘があった。特に、外国語科目や理系におけるクラス指定の同一科目におけるクラス間の平準化（授業の質、課題量、難易度、成績評価基準）、シラバス（内容や評価基準）に則った授業実施、実用性（たとえば、英語におけるスピーキング）や双方向性を重視した授業スタイルへの改善、理系科目などにおける高大接続の改善（内容の重複やギャップ）は、今後の主要な課題として挙げられる。

一方、肯定的意見としては、第一に、ILAS セミナー等の少人数授業や対話型の授業は、教員との距離が近く、質問もしやすいため学習意欲やモチベーションの向上につながっているとの回答があった。第二に、他分野への知的好奇心を満たす場としての意義の指摘があった。たとえば、文系学生による自然科学系科目の受講、あるいはその逆において、自身の専門外の知識を得られる点や、最先端の研究に触れられるリレー講義等が高く評価されていた。第三に、教科書的な内容にとどまらず、教員自身の研究内容や熱意が伝わる講義は満足度が高かった。

「第 5 章 大学教育での向上感」において設けた Q.12~Q.17 の質問は、各学部におけるカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに関連する内容である。2 回生進級時アンケートは、入学後の一つの通過点でのモニターという位置づけにある。2017 年度卒業生より、卒業生進路調査アンケートのいくつかの項目でこれらとのリンクを可能にし、その分析結果を示したように、「専門以外の幅広い知識と教養」

や「専門分野で基礎となる学力」の向上感に対する肯定的回答率に着目すると、それぞれ卒業時において84%、89%であった。また、この2回生進級時アンケート Q.44「全学共通科目に対する期待の実現度」では82%、Q.47「総合的満足度」においても91%の肯定的意見が得られた。このように、2回生進級時における教養・共通教育に対する満足度が卒業時においても保持され、大学生活全体を通じた印象、評価に繋がっていることが示唆された。このことに留意して、継続した改善努力が求められる。

今後は、本アンケートで示唆された重要項目について、教務データ等のより正確な資料をもとに検証した上で、アンケートの指摘が事実であれば具体的な対策を講じられるように切に願うものである。今年も学部の進級時ガイダンスにて本アンケートに協力をお願いした。また学部とともに国際高等教育院関係者にもご尽力をいただき、本アンケートの回収を進めることができた。これらのご協力に改めて感謝したい。

最後に、長文のアンケートに回答し貴重なデータを提供していただいた学生の皆さんに厚く御礼を申し上げます。また、膨大なデータを的確に、工夫を凝らして解析していただき国際高等教育院共通教育推進課企画調整掛の皆様感謝を申し上げます。

2025 年度 2 回生進級時アンケート (2024 年度入学生)

(実施期間：2025.04.01 -2025.06.16)

【初めにお読みください】

- ・本アンケートは記名式で行います。また、有効回答のなかから抽選で粗品を進呈いたします。
- ・回答結果は、個人が特定できる形での公表はしません。なお、学生番号と氏名は大学から粗品当選者への連絡・確認に使用します。
- ・本調査は、入学後 1 年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について 2 回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることを目的としています。
- ・あなたの昨年度 1 年間を振り返って【2025 年 5 月 19 日 (月)】までに回答してください。

【入学してからの状況について】

Q.1 あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。(非公開)

- ①一般入試 (文系) ②一般入試 (理系) ③特色入試
④外国人留学生特別選抜 ⑤その他

Q.2 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部
⑦医学部 (医学科) ⑧医学部 (人間健康科学科) ⑨薬学部 ⑩工学部 ⑪農学部

Q.3 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていましたか。

- ①はっきり決めていた ②大まかには決めていた
③いくつかあったが、どれとは決めていなかった ④あまり決めていなかった

Q.4 今現在、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていますか。

- ①はっきり決めている ②大まかには決めている
③いくつかあるが、どれとは決めていない ④あまり決めていない

Q.5 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

- ①変わっていない ②変わった

Q.6 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

- ①よく一致している ②まあ一致している
③どちらかという一致していない ④あまり一致していない

Q.7~Q.11 入学当初から現在までの 5 つの時期で、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない

- ④あまり意欲なし ⑤まったく意欲なし

- Q.7 入学当初の時期：() Q.8 前期半ばの時期：()
Q.9 後期開始の時期：() Q.10 後期半ばの時期：() Q.11 現在：()

【学習成果について】

Q.12～Q.17 入学後1年間の授業を受けて、次の各質問におけるあなたの向上感をお聞きします。

Q.12 1年間で、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 1年間で、あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.16 1年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.17 1年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第一外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した
③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

【履修と成績について】

Q.18 1回生でILASセミナーを履修しましたか。

- ①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

Q.19 「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。

- ①とても満足している ②どちらかという満足している
③どちらかという満足していない ④満足していない

Q.20 「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。

- ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた
③履修できない曜日・時限だった ④何度か授業に出たが興味をもてなかった
⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（具体的理由： ）

Q.21 「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかったその理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた
④忙しくて履修できそうになかった ⑤その他（具体的理由： ）

Q.22 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、1回生で履修した科目の□欄にチェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へすすんでください。

- スポーツ実習 IA スポーツ実習 IB 物理学実験 基礎化学実験
生物学実習 I 生物学実習 II 生物学実習 III 地球科学実験

Q.23～Q.25 1回生の間に取得した単位についてお聞きします。

Q.23 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50
⑥50>単位 \geq 45 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 30 ⑩30>単位 \geq 25
⑪25>単位

Q.24～Q.25 「Q.23」について、その取得単位数のうち、全学共通科目についての取得単位数はどれくらいか、「前期」「後期」それぞれお答えください。

Q.24 全学共通科目の前期取得単位数：

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20
⑥20>単位 \geq 15 ⑦15>単位

Q.25 全学共通科目の後期取得単位数：

- ①単位 \geq 40 ②40 > 単位 \geq 35 ③35 > 単位 \geq 30 ④30 > 単位 \geq 25 ⑤25 > 単位 \geq 20
⑥20 > 単位 \geq 15 ⑦15 > 単位

Q.26～Q.29 1回生の間に単位を取得した科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。次の科目群別にお答えください。

Q.26 人文・社会科学科目群の科目について

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.27 自然科学科目群の科目について

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.28 外国語科目群の英語科目について

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.29 外国語科目群の初修外国語科目について

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.30 あなたの1回生（前期+後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください。（非公開）

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0 > GPA \geq 3.5 ③3.5 > GPA \geq 3.0 ④3.0 > GPA \geq 2.5
⑤2.5 > GPA \geq 2.0 ⑥2.0 > GPA \geq 1.5 ⑦1.5 > GPA

Q.31 あなたが1回生後期（2024/12/7, 12/21）に受けた TOEFL-ITP のスコアはどのレベルでしたか。

- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア
⑤受験していない

1回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします。

Q.32 全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している
③どちらかといえば納得できない ④納得できない

Q.33 「どちらかといえば納得できない」、あるいは「納得できない」と答えた人にお尋ねします。

成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。

- 成績評価が厳しすぎる
 成績評価が甘すぎる
 成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない



2025（令和7）年度2回生進級時アンケート報告書

令和8年3月 発行

編集 京都大学国際高等教育院

発行 京都大学国際高等教育院
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
Tel 075-753-6690/6513
